[illegible]

岸辺　ルヴァン

バグ ミー ベイビー

岸辺 ルヴァン

かちゃ。

「ボクは部屋の鍵をかけなかった。外出中に限ってね。知らない隙に入られているのはかまわないけれど、入ってこられるのは堪らないというスタンスだよ。これはどうかな」

インターフォンは返答に代えて、からんころんとベルを鳴らし、自動ドアを開けた。オーバーオールにキャスケットを合わせた彼は、促されるのに従い『ミルク世紀』とペイントされた看板と、Ａ４用紙三枚分を埋め尽くす説明書きの張ってある壁とに挟まれたビルのなかへ入っていった。

そこは古典的な純喫茶だった。長く仕舞われていたグリースの入った引き出しを開けたような、懐かしく甘い埃の香りがした。空調の行き届いた店内は、毒々しさと重厚さが有機的に介在していた。足がとられるほど分厚い絨毯が敷いてある八畳ばかりのスペースには、ラジコン用コースが八の字を描き備え付けら

れてあった。それを取り囲むように、レースが視聴可能な配置でテーブルは並べられていた。先客はなく彼一人きりだった。音楽は鳴っておらず、吸音材だらけで施工されてあるためか、物音をたてることすら憚られるほど静かだった。彼が紫色のベルベット生地製の椅子へ座ると、カウンターの奥から豪勢に口髭をたくわえた小太りの男が、トレイにミルクセーキを載せ運んできた。注文のやり取りはない。コインを投入しボタンを押せばジュースを吐き出す自動販売機みたいに、システマチックに、無音で遂行された。席についている彼が手を出し受け取ろうとする動作を、白い手袋をはめた口髭のマスターらしき人物は無言で制し、自動ドアへと視線を向けながら、テーブルにコースターとミルクセーキを置きカウンターへ戻っていった。接触のない無味なサービスを受けた彼は、それを意に介するでもなく、ストローを指に挟み、慣れた手つきでグラスの中をかき混ぜていた。

背後から滑車の駆動する震動が、ラジコン用コースに伝えられた。それでも彼

は別段気にするでもなく、喫茶店の客らしく、スポーツ新聞を開くくらいのゆとりある様子でミルクセーキを吸い上げていた。そんな彼の視界に、茶色い三角のヌイグルミが現れた。コースを滑らかに走り二度ほどコーナーを曲がると、彼の前で停車した。

「なぜ君は部屋の鍵をかけないのかな」

粗製乱造があらわな質感のヌイグルミは、微動だにせず、内蔵された小型のスピーカを通し機械仕掛けの音声で語りかけた。布にこもり、くぐもった非合法な響きで。彼はストローから口を外すと「なるほど。まるで明晰夢をみているみたいだな。鍵をかけない理由を、茶色い君に話すんだね。いいだろう。うん。それは無力さを知っているからかもしれないね」とたじろぐことなく、常連客から今シーズンの監督の采配について意見を求められたかのように、グラスを覗き語りはじめた。

「面識のない他人の家に、留守を見計らい侵入する目的の大半は金銭だと思うんだ。そして犯行は計画的に遂行される。フードコンサルタントなんかよりも、ずっと慎重に、物件に関する条件を精査するはずだよ。ターゲットが居住するマンションのセキュリティー強度や生活リズムだけでなく、近隣住人の行動パターンや死角まで抜かりなくね。だから、もしもターゲットに特定されてしまったのであれば、肩甲骨に異常をきたすほどのお手上げ状態なんだ。不運を嘆くよりも、プロフェッショナルな妙技に感心する他ない。防衛策なんて皆無なのだからね。それに、本当に価値があるものは盗めないらしいよ。残念ながら、受け売りだけれど」

彼は句点をうなずきで表し、ミルクセーキにささったストローを口にした。グラスの半分を一息で飲み込むと、体へ水分が浸された充足で満たされ、椅子に深く体重を預け、吊るされた模造品のシャンデリアを涙目で眺めていた。止まったままの茶色いヌイグルミは、電源が切れたかのように静かだった。そして、

あらかじめ設定されたタイマーにより再稼働したのか、やにわに走りだすと、コースを一周しまた彼の前へと帰ってきた。

「なぜ君は部屋の鍵をかけないのかな」

急な水分の摂取による胃の痙攣で、彼は小さくしゃっくりをあげていた。口からの呼吸を止め、不規則な内臓の運動が引き起こす波をいくつか耐えてから答えた。

「なるほど。いいね。生憎にもボクは、触れるものすべてを、こじつけた理由に変えることができるんだ。錬金術みたいにね。特技と言ってもいいだろう。収拾がつかなくなり、真実を埋没させてしまうほどにね。ただし、ある場合には、でっち上げた理由によって、無自覚であった真理に近づくことだってあるんだ。見当はずれの迷妄が大半であるのは言うまでもないけれどね。まあ、そんなことは特に問題じゃない。その事象を囲うように点在する人工衛星を打ち

上げまくり、実態との距離を測るのが目的なんだから」
彼はせり上がるしゃっくりを押し込めるために、言葉を切り腹筋に力を入れた。茶色いヌイグルミは、目を見開き無表情で止まっていた。度重なるレースの勲章か、気分を害した客からの仕打ちか、周到な哀愁の演出なのか、一等身から生えている足の縫製に綻びがあった。

「前置きが長い聞かれたことだけに答えればいいできないなら失せろ」

一文まとめて断定する語法でセンテンスを多く話したことにより、茶色い三角のヌイグルミが有する違和感が露骨となった。それは、ことごとく、アクセントがずれているということだ。訛りや片言でない、意図された不整合さがあった。計画的にてんでちぐはぐに。それは新しい国の、新しい言語のような印象を与えた。彼はじっくりと茶色いヌイグルミが発した言葉を咀嚼し、呑み込んでから言った。

「よく理解したよ。だいたいのところはね。君が被ったダメージの具合から、ここが紳士ばかりが集う社交場だってこともね。いいだろう。もう一度、鍵をかけない理由について語り合おう。ボクは透明で頑丈な鍵をかけているから、だね」賢明であろうと注意を払っているのが、胸の前で組まれた指と重心の置き方で示されていた。

「例えばそれが出来心による衝動的な侵入者だったとしよう。起点と終点が、矢印一本の図面しか描けない切羽詰まった状況だよ。ポケットの小銭がすべてだというのに、ビールを買う金を捻出したいという血迷った精神でね。欲望は満タンなのに、どこまでも臆病な魂胆だ。ひっく。失礼。そんな彼らが鍵の開いている部屋と偶然に遭遇し、天から授かった幸運だと信じて侵入するだろうか。きっと在宅中もしくは短時間での帰宅を予見し、去っていく確率の方がずっと高いだろう。彼らだってもっとずさんに、窓ガラスを割り、無理やりにこじ開けることで安心したいんだ。そこで猜疑心を持たず入ってしまえるような、

最低限の警戒心やデリカシーすらない侵入者であったならば、状況証拠をまき散らして帰るに違いないからね。しっぽはすぐに掴めるさ。ひゃっく。申し訳ない。マンションの鍵はかけられていて然るべきであるという、常識によって施錠されているんだよ」

彼はしゃっくりを耐えるために唾液を飲み込むと、あたかも続きを語るかのように、茶色い三角のヌイグルミへの質問に移行した。「ところでボクは口を動かしながらも頭の半分を使って、君について考えていたんだ。君がどんな理由でこの店を作ったんだろうかってね。どれだけ好意的に解釈したって、繁盛させたいという意思は感じられないからね。むしろ客を招かないためのシステムだけを、率先して採用しているようにさえ思える。高く強固な外壁をこしらえてさ。ただし完全に閉鎖され、血が通わなくなるの」まで言ったところで、茶色い三角のヌイグルミは一方的に滑走していた。先ほどと同じ速度でコースを周り、同じ地点で停止し、同じセリフを言った。

「なぜ君は部屋の鍵をかけないのかな」

彼はミルクセーキからストローを外し、グラスの上で指を十文字に交差させ持ち上げると、開いた穴から飲み干した。「これはね、しゃっくりを止めるための土着的なまじないなんだ。オートマチックなデモンストレーションを終わらせる効果にも期待を寄せているよ。ループする君に滑稽な姿ばかり晒すなんて、“痛恨”の極みになってしまうだろうからね。いずれは拒絶するのであろう新しい世界であったとしても、おはよう、くらいは言わせてもらいたいんだ。礼儀としてさ。いささか無口な君に、自己満足の独り言をこぼし過ぎているね。どうか忘れて欲しい。さあ、理由について話そう。次元を超えた娯楽のために、だよ」。彼はそう言ってグラスの氷を口に含み、ゆっくり溶かしながら、真剣な表情で言った。

「ボクが部屋を出るとね、ピンクのジャージにキャップを被ったママではないママと、スーツに脇汗が染み込む巨漢の会社員、ややこしく手を合わせ挨拶す

るヒップホップなフリーター、赤いランドセルを背負った学級委員の小学生とペットのウサギがね、それぞれの地点からボクの部屋へと集まってくるんだ。無関係にも思える彼らをよく見れば、お揃いの六角星のネックレスを首からさげている。視線すら交わらせることなく玄関のドアを開け、冷蔵庫のチルド室へ頭を突っ込み、一人ずつ順番に向こう側へと渡っていくんだ。わかるかな。こんな可能性をゼロにしてしまいたくないんだ。他人の家の冷蔵庫を勝手に開けるなんてどんな教育を受けてきたのかしら、なんてことは考えずにね。ひょっとしたら、なんて帰宅後にレッドブルや納豆の位置を確認する楽しみを知ることができるのだから。誰もいないことで寂しさが蔭るはずの独り暮らしの部屋で、誰もいないことが安らぎに代わるのだから。マイナスをプラスに転じていると思い込めなくもないよね。普遍性にホワイトチョコレートでグラッサージュして、ボクを迎えてくれるみたいにだよ」

彼は言い終えると、角の丸くなった氷をグラスから口へ流した。そして勢いよ

く噛み砕き立ち上がると、茶色い三角のヌイグルミの頭を手で押さえつけ、動きを封じて言った。

「ただしボクは鍵をかけなかったがために、二度も闖入者をご招待してしまった。どんな冗長な説明をとってつけたって、すぐに剝がれてしまうんだ。そう、迷惑を被らないためにも必ず鍵はかけた方がいい。ボクは一人目の侵入者についてのいきさつを、時系列に沿って、仔細に話さなければならなかったんだ。冷蔵庫がパラレルワールドの入り口になっているかもしれないという、捨てるべきゴミ箱の見つからないガラクタと、同等の過去についてね。ボクが聞く側の立場であったならば、特殊な電波をキャッチする危険人物であると察知し、真剣と関心の間で表情を作り、真心を含んだ苦笑いと相槌を添えつつ、カルボナーラって意外とシンプルな材料だけで作れるよね、などと唐突な角度から幾度も話題をすり替え、安全にその場を切り抜ける方法を考えただろう。そんな内容だった。それでも話そうとした。二人目の侵入者に向けてね」

からんころんと自動ドアが鳴った。

誰かにとっての入り口か、誰かにとっての出口が開いた。

1 - 1

玄関の端に揃えられたヒールには、発音の仕方がわからない組み合わせで綴られたアルファベットが書かれてあった。しなやかな曲線が綺麗な、予期せぬ靴。ボクが靴紐を解きながら見惚れた様子で、ゆっくりとした動作を保っているのは、頭を緊急で高速回転させている余波だ。記憶から靴のフォルダを開き、該当する女性を検索した。押しかけられるような関係性と、逆恨みされるような後ろめたいことを条件に加え絞り込んでいた。秒数が伸縮するほどまでに巡らせたせいで、フリーズしそうだった。そのおかげで、どこに出かけて帰ってきたところなのかわからなくなり、握った紙袋を覗くはめになってしまったよ。

そこにはフレンチプレス用に荒くひかれたイタリア産のコーヒー豆と、キノコの山が入っていた。日常のマテリアルが動転へのサイドブレーキとなり、落ち着きを取り戻させてくれたんだ。

戸惑わされるなんて筋違いだってね。ボクはこの部屋の住人なのだから。買い物に出たくらいで賃貸契約は揺るがない。そういった権利はしかるべき順序で、管理会社や不動産屋からの電話や郵送による、再三にわたっての通告の果てに失効されるのだ。猶予が設けられているんだよ。国家権力がインターフォンを鳴らすのとは、わけが違う。それに遡ってひとつの罪もなく暮らすなど、埃を浴びずに生活するのと変わらない。見えないだけで存在するんだ。ボクは侵入者と対峙することにした。ここで引き返したところで好転は期待できないだろうし、なるようにしかならない地点にいるのだからね。さらに泥のついたスニーカや、底のすり減った紳士靴が脱いであったのであれば、外へ出て電話機能を立ち上げ、三桁の数字をキーパッドに入力し発信しただろう。でも、ここに

あるのは素敵なヒールなんだ。悪い人に履けるはずなんてないよ。懐疑と不安を好奇心と猥雑で丸め込んだ。大げさに音を立てながら紙袋を靴棚に置き、侵入者に帰宅を覚らせた。さらにリビングの前で、身だしなみを整えられるだけの短い間を与えてから、ドアを開いた。

ソファに座る赤毛のボブの知らない女の子。ボクの登場にも素知らぬまま、振り返りもせずに窓の外へと待ちくたびれた様子を送っていた。想定にない出迎え方をされた要因は、耳から垂れた白いケーブルのイヤフォンのせいだろう。ボクは気がつかれていない空白の時間を有効利用することにした。背の高い薄毛のオジサンを筆頭に他の侵入者が隠れてはいないか、盗まれたり破損させられたりした物はないかと部屋の間違い探しに目を回すも、散らかり加減は黄金律を保っていたし、目覚まし時計は正確に五分遅れていた。テーブルに二組ずつ置かれたスターバックスのコーヒーとパンを除いては、純然なボクの部屋であった。温度と匂いの浸透率が、短くはない滞在を知らせていた。

そして彼女に目が留まる。黒い魚のイラストが幾何学的に散りばめられた白のワンピースに、丈の短い紺のライダースジャケットを羽織っていた。斜め後ろから捉える丸く膨らんだほっぺは、捏ねたてのパン生地のように白く張りがあり、柔らかそうだった。すっぽりと腕のなかに収まるであろう小柄さと合わさり、思わず抱きしめたくなった。たとえ衝動に従順に行動へ移したとしても、勝手に上がり込んでいるというアドバンテージで。相殺してお釣りがくるはずだ。実行はしないけれどね。

さて、どうして気付かせるべきだろうか。背後から近づき肩を叩いたならば、鼓動と体を跳ねさせ驚かせてしまうだろう。ボリュームバランスの壊れた悲鳴まで浴びせられかねない。それに割れるとわかっていながら、風船へ針を刺すのは気が進まないんだ。じっと待つ方が退屈だけれども、ましに思えた。仕方なく人身売買をするブローカの心持ちで、彼女を値踏みしながら凝視することにしたよ。よほど悪趣味な選択としてね。リビングの段差に腰をかけ、室内の

均衡を乱す異物となり事細かに眺めた。すると彼女は、邪な気配を背後から感じたためか、首をほぐす自然なしぐさで、すぐさまボクを視界に引っかけた。目を大きく開き、イヤフォンを耳から抜くと、座ったままでこくんと頭を下げた。赤色のボブが傾斜し流れるのにつられ、右耳のピアスも揺れた。落ちつかなげに髪に手をあて、話しだすべきなのか迷いを泳がせていた。そこへ、こちらから先制攻撃をしかけた。

「やあ、後ろ姿ではわからなかったよ。久しぶりだね。どうしたの」と親しげに右手を上げる口調で言った。

「また彼と喧嘩でもしたのかな。あいつも思い込みが激しいところがあるからね。かまってくれなくて、淋しくなってしまったのかな。ボクでよかったらいくらでも愚痴くらい聞くから言ってごらん。みたいな展開ではないですよね。はて、誰ですか」

責めることなく、おどけすぎずに警戒レベルを絞って言った。途中でうなずきながら目を潤ませられたのは計算外だったけれどね。彼女は視線を下げ、イヤフォンを手際よくアイポッドに巻きつけると、ソファへ置いてから返答した。

「あの、はい。すいません。その、ずっと、部屋の外で、待っていたんです」ぽつりぽつりと言葉を区切っていた。

「近くの住人に怪しまれるくらい、じっと立ってました。それで、たぶん、本当に誰かに、管理人さんを呼ばれてしまったんです。そこで事情を説明しても、信じてもらえなくて。むしろどんどん、怪しまれるばっかりで。どうしていいのか、わからなかったんです」

テーブルからスターバックスの容器を持ち上げ、口をつけずに両手で握り話を続けた。

「まるでつまみ出されるみたいに、管理人さんにエレベータまで連れていかれ

たんです。すると廊下の奥から背の高い外国人がやってきて、流暢な日本語を使い、ここの住人で彼女の友人だって、管理人さんを説得してくれたんです。そのまま部屋まで案内してもらいました。ひょっとしてあの方と、お知り合いですか」

ボクは不意にでてしまった驚きと舌打ちをごまかすため、リズミカルに数回打ち鳴らしてから「たぶん」とだけ肩をすくめ言った。「やっぱりどこか空気が似ていると思ったんです」とげんなりした気持ちに拍車をかける言葉を浴びせられ、体が重たくなった。ひきつる口元は奥歯にナッツがはさまり、なかなか取り除けないふりでごまかし「そのボクの分身たる彼は、どこに行ってしまったのかな」と自虐的に尋ねた。

「コーヒー豆とお菓子を買いに出て行かれました。もうかなり前になりますね。私が持ってきたキャラメルマキアートが原因なんです。気に障ったみたいで、

僕が本物のコーヒーをご馳走するから、と言って出ていかれてしまいました」
彼をまねた口調に触発されひそめてしまう眉は、目にゴミが入ったふりをした。
力いっぱいまぶたを閉じ、こめかみに刺激を送り、気持ちを入れ替え応じた。

「そうか、そうか。それは安心したよ。友人の家へ来たならば、鍵が開いていたうえに、知らない女の子がソファで座って音楽を聴いていたのだから。むしろ驚かない方がまともじゃない。許されざる領域に手をだし、殺し屋に追われた少女を匿っているのではないかって想像をしたくらいだよ。コーヒーの件は気にしなくていいよ。彼はそういう奴だからね。なんて言うのかな、目の前で接している人間に対して、全力で対応してしまうタイプなんだ。もの凄く前向きな解釈でもってフォローをするならば、そう思えなくもないという程度だけれども。確固たる意志があるんだ。そういうことにしておこう。しかし困ったな。ボクも彼と約束をしていたんだ。忘れられていなければね。他に予定もないから、ここで一緒に待たせてもらってもいいかな」

うなずき促す彼女へ近づくと、ベルガモットに似た柑橘の香りがした。ボクはできる限り距離をとって、二人掛けのソファへ腰を下ろした。いつもの座り心地との違いに、自分の物ではなくなってしまったようだった。彼女はこちらの様子を窺いながら、出会いの緊張を和らげるために気遣いを寄こしてきた。

「あの、もしよかったら、迷惑でなかったらです。パン、食べませんか。クルミとブルードベルニュが練り込まれた全粒粉のパンです。拒否されてしまった、偽物のコーヒーとセットでいかがですか」

いたずらな様子で言ってから、返答も聞かずにテーブルのパンとキャラメルマキアートをセットにしてボクの前へずらしてきた。左耳に三個ピアスが付いているのがわかった。

「ありがとう。喜んでいただくよ」と雰囲気に任せて返事をしたものの、パンを食べる気には毛頭ならなかった。キノコの山が食べたくて、買い物へ出たの

だからね。うずうずするほどに欲していたんだ。しかし遠慮していると勘違いされても困るから、とりあえず手を伸ばしたという既成事実を生むためだけにキャラメルマキアートを持ち上げ、蓋に空いた穴を舌で閉じながら飲んでいるふりをしたよ。ボクは加糖された飲み物を好まないし、スターバックスではソイラテしか頼まないと決めているんだ。その点においては、ボクにとっても偽物であると言えるね。あいにく本物の所在は不明だけれど。

二口ほど続けざまに飲むふりをし、重量の変わらないコーヒーをテーブルに置いて、視線を前へ預けたまま状況を紐解くための質問を投げかけた。

「君が彼に会いにきた理由は聞いてもいいのかな。つまりはこの部屋を訪れるに至った経緯だね。野暮にならないのであれば、興味があるんだ。君みたいな素敵なヒールを履いたかわいい女の子と、さえない長身のオジサンとの関係がね。もしも話が重たくなってしまうのならば、大胆に編集してもらってかまわないからさ」

この場所で―哲学的な意味を排除して―自分が何者であるのか、晒されても困らないという後ろ盾により、すんなり彼の友人として問いかけられた。不幸にもね。

「ありがとうございます。私も大好きな靴なので、褒めてもらえてすっごく嬉しいです。マロノブラニクのヒールなんですよ。知っていますか。映画でヒロインが履いているのを見つけて、一目惚れしたんです。その時は、ヒールばかりに気を取られて、ストーリーが入ってこないくらいに夢中でしたよ。それからずっと憧れていた靴で、やっと手に入れたんです。でも私みたいな子供では、まだ履かされてしまっていますね。早くヒールに追いつける女性にならないと。あれ、なんだか浮かれてしまって、ごめんなさい。ここに来た、理由ですよね……。はい。お答えします」

間隔をおいてからの想定にない溌剌とした反応に、鼻だけで「うん」と返した。

あらゆる仮説が、まばたきの数だけシチュエーションを変えて膨らんでいたんだ。彼女はそれをわかっているのか、さらに間隔をおき、勿体つけてから切りだした。

「行く手を……」と言ってからすぐに、声色を作り直した。あどけなさや瑞々しさを抑え、アニメ的なキャラクタリセーションされた声へと切り替えた。

「行く手を阻む、姿の見えない謎の組織。彼らに翻弄されて、ぶつかったり、落っこちたり、思いどおりには進ませてくれないノン。それは、転がる卵のように。後ろへ取りこぼしてたって、補完はできないノン。欠けさせられたって、前進を強いられるノン。聞きます、買います。語ります、売ります。あなたの過去ですノンノン」

言い終わったあとの照れ笑いに助けられたよ。面を食らって、あたふたとするのも忘れていたのだからね。ボクからは微笑を返し、どこの部分に対してでも

なく「すごいね」とだけ言うのがやっとだった。彼女は「ありがとうございます」と唇を動かすと、足元に置いてあったピンクのバレンシアガのバッグに手を伸ばした。そこから薄いケースを取り出し、名刺を一枚抜くと、仰々しく芝居がかった作法で渡してきた。一連の過剰な演出は照れ隠しの虚勢なのか、両耳が真っ赤だった。肌の白さとのコントラストによって、彼女と切り離された部位に思えるほど浮かんでいた。ボクは前を向く姿勢を崩さず、右手で粗野に受け取った。対話する相手の顔を見るのがひどく苦手だからね。

名刺へ目を落すと、こちらの反応を窺っているのが、ひしひしと右半身に伝わった。ぼかぼかと熱を帯びるくらいにね。このように期待された場面での返答には、どの選択をしても恥じらいがある。経験が増すほどに、無愛想にならざるを得なかった。それに名刺には、例のオジサンと彼女を結び付けるような手がかりは含まれていない。ボクは「ユーイーｉｎｃ」という社名とウェブサイトのＵＲＬ、電話番号だけしか書かれていない紙切れを、暗記するほどなぞっ

ていたんだ。中央のスペースに描かれた、イームズチェアから妄想するだけの余裕なんてない。ひとしきり待たせてから、「すごいね」と口癖を場つなぎ的に漏らすだけで精一杯だったよ。

彼女はそれを聞くとボクに倣い、体ごと視線を前に向けて、クッションを膝の上で抱いた。お互いに横にいる相手ではなく、窓の外へ向かって会話をするのは、ホームドラマのセットでカメラを相手に撮影しているみたいで滑稽だったよ。ボクにとっては落ち着きを覚えるほど、ずいぶんと慣れ親しんだ常套手段だけれどね。そして彼女から会話がはじまる。とても長い会話が。

「会社の名刺です。過去の話を、売買しているんです。私はそこで買い取りを専門とする部署に所属しています。先ほどの口上はＣＭ用のものです。会社の概要を説明する前に、述べることが義務づけられています」

業務に関する報告らしさを示した抑揚のない口調だったから、ボクもそれにつ

られ冷たいニュアンスで言った。

「過去をか。すごいね。部屋へ突然に押しかけ、インターフォン越しにとんでもない口上を述べてから、扉を開けさせて商談をしているのだったらね。あんなのを、だよ。さらに契約をまとめ利益へと結びつけているんだよね。おそらく君は桁外れた営業テクニックの持ち主なんだろうね。そこから給料が支払われ、靴や鞄が買えるのだから。例えばカラーヒヨコが産んだカラー卵だって、ダンボール単位で捌くのも容易だろうね。もし嫌味に聞こえていたならば心外だよ。本心だからね。ボクにはミッキーマウス型の豆腐をもってしても、一丁だってろくに買ってもらえる自信がないんだ。おそらくは在庫の山で、新しいアトラクションを作ってしまう始末さ」

次から次へと皮肉ばかりが連鎖し、冷笑が抑えられなかった。アヒルでも気がつくほど露骨にね。

「そうですよね。うさん臭いって思いますよね。わかっているんです。だから基本的に内部の人間か、必要に迫られた場面以外では仕事の話をしません。守秘義務もありますし、信用してもらうのは容易ではありませんから。それに飛び込みの営業もしていません。電話やメールで依頼を受けてから連絡を取り合い、実際にお伺いし、過去の話を聞かせてもらっています。その音声を収めたレコーダを会社へと持ち帰り、検索ワードの設定やカテゴリ分別、見出しの作成などを経てデータベースに保管しています。細かく言えば、情報の公開範囲やレベル、販売可能な回数、有効期限なんかも必要に従って記入します。入力漏れがあれば上司からこっぴどく叱られます。その辺も含め、私はごく一般的な会社員です」

はきはきとした言葉には圧力があった。彼女と対面してから初めて、押される格好となってしまったよ。積極的に足を組み直し、腕組みをしてから言った。

「気分を悪くしてしまったなら、申し訳なく思うよ。そんな商売があるなんて

知らなかったんだ。君の発言を受けて、存在は認識したよ。たちの悪い冗談や詐欺まがいの集団ではないんだってね。話の伝わらなかった我らがマンションの管理人にも同情をしつつだよ。でもね、過去の話を売買する会社があると知ったところで、利用者やフローチャートといった実態が見えてこないんだ。電話やメールの回線がパンクするほどに注文が殺到していそうであり、空っぽのマンションの一室で暇をもてあまして掃除ばかりをしていそうでもあるんだ。誕生日と命日みたいに、必然と偶然が螺旋状に絡まった、需要と供給のバランスを築く方が難しいだろうけれどさ」

シニカルな成分をできるだけ混ぜないよう配慮した結果がこれだ。

「不思議と、ほとんど差がないんです。開いた穴と蓋の、いたちごっこじゃないかって思えるくらいです。あらかじめ決められた絶対数のなかで、持ち主だけを交換しているみたいに。ただ商売ですから供給を滞らせないため、一定量のストックはしています。長さやスペクタクルの有無、マニア受けなどニーズ

によって取り引きされる価格は変動します。内実はほとんど古着屋さんや、中古レコード屋さんと同じです。ビンテージのデニムやレコードの製造年、タグ、保存状態や希少価値と置き換えられます。買って売る、とてもシンプルな構造です」

物分かりの悪いクレーマーを宥める丁寧な対応だった。ボクは不名誉な扱いに紳士的な態度で抗議をした。

「なるほどね。仕組みだって表層は理解できた気にさせられているよ。ホワイトボードの前に立って図解だってできそうだ。じゃあ、具体的に顧客となるメインターゲットはどのあたりになるのかな。ボクの知人たちでシュミレートしても、経済的に困窮し過去の話をパンに代える奴なんて見当たらないんだ。逆もまた然りだね。パン屋が午前三時から粉まみれになって得た賃金で、過去の話を購入するなんてね。焦げ臭いと思ってしまうんだよ。その、プライバシーポリシーとかの範囲内でいいから、顧客について教えてもらえないかな」

「何だか、インタビューされている気分になってきました」
彼女は笑いながら、そう言った。

「うん。たしかに。ボクは喋りすぎている」。大げさなまでにわかりやすく機嫌を損ねてしまったよ。「きっと、ひとりなるとボディーブローのような自己嫌悪をくらうんだ。アルコールと嘔吐、ギャンブルと負債みたいにセットでね。時間を巻き戻したくなっているよ。ごめん。黙るから」指摘された羞恥により、理不尽とは知りながらも無視を決め込もうとしたんだ。悲しげな目を作ってね。完全に拗ねてしまっていたのだから致し方ない。こうなってしまうと、自分でも手に負えない。

「いえ。そんなつもりじゃありません。あの、すいません。とても楽しいんです。ほとんど興味を持って質問されたりしないので。浮かれていました。誤解

させてしまったなら謝ります。ごめんなさい。どうかそんな冷たい顔をしないでください……。そうですね、顧客についてですよね」

彼女はジャケットの胸元を掴むと、軌道修正を示すように姿勢を正し、会話へと戻っていった。

「買い取りが専門のため詳しいことまではわからないんです。統計的な結果やデータは見たことがありません。だからお答えできるのは、現場での体感だけなのですが、職業や年齢は幅広く男女比もほぼ半々です。過去を扱っているという商品の性質上、若年層がやや少ないくらいでしょうか。なかには映画関係者や小説家など、物語のネタとして購入される方もおられますがごく少数です。コンビニで買い物をしたり、ベランダで洗濯物を干しているような普通の人たちばかりが、個人的に必要とされています。ひとつ異業種との違いを挙げるならば、金銭のやり取りだけでなく、救いや慰めを求めて依頼されるお客さんがおられることくらいですね。たぶん必要とされない方には、どこまでいっても

理解できない業種です。ネジの専門店みたいにです。あまり参考にならなくてすいません」

不機嫌なせいで、ボクは何を知りたがっていたのかわからなくなった。とりあえずの場つなぎとして「すごいね」と言ってから、「へえ」を等間隔で重ねた。それらの舞い落ちる葉に、クリームをはさみ、ミルフォイユを作るイメージで穏やかさの回復に務めていた。まだ聞くべき大切な質問が残されていたからね。それさえなければ席を立っていたよ。自分の部屋だから行き先なんてないんだけれど。表層に粉糖をかけ、しっかりとキャラメルゼしてから尋ねた。

「最後の質問をしていいかな。ドキュメンタリーだったら、あなたにとって過去の話を買うとは、みたいな乱暴な総括のタイミングだよ。ねえ、どうしてこの部屋に来たのかな。バスに乗ってやって来ました、とか手段ではない方の、目的を教えてもらえるかな」

彼女は回りくどい質問に笑顔を浮かべ、「過去の話を買って欲しいと、依頼を受けて来ました。地下鉄に乗ってです」と悪戯っぽく言った。

それによりボクは、集めていた悠然とした態度をひっくり返してしまった。

「よくわからないな。頼んだ覚えなんてないよ。どれほど酩酊していたとしてもね。存在すら知らなかったのだから依頼のしようがない。それとも迷惑メールみたいに計算された誤送信なのかな。期待なんてしていなかったけれど、がっかりしたよ。なんだか、ずいぶん冷めてしまったな」

「いえ、違うんです。私を案内してくれた背の高い、ここの住人の方から依頼を受けたんです。ただ、不快になられるのも無理はありませんよね。お友達との約束で訪ねて来られて、私みたいな、わけがわからないのが居たら迷惑ですよね。ごめんなさい。せっかくのお休みがこんなことになってしまって。私としてもどうしていいのか悩んでいるんです。こんな事例は初めてなんです。案

件が急を要するため、異例の措置として待たせてもらっています。でも、いつまで待てばいいのか、本当は気分を害され断られてしまったのか、また戻ってから出直してくるべきなのかな……正直、困っています。巻き込んでしまって、ごめんなさい」

オジサンに向けて放たれた矢が、流れ弾的にこちらへ飛んできたかに思えたが、初めから標的は一直線でボクの頭だった。うっかりここの住人であることを露呈した焦りと合わさり、機嫌を損ねていたことなどかき消されてしまったよ。それに出直してこられるなど厄介でしかないからね。最善の対処法を選択するためにも情報が欲しかった。容疑者特定に協力的な態度で捜査に加担する、真犯人の気持ちで歩み寄ったんだ。

「そうだったのか。知らなかったよ。こちらとしても悪く思うよ。よかったら、その物好きなクライアントの奇特な案件について、もう少し詳しく聞かせては

もらえないかな。ある期間の彼については、当人より詳しいんだ。その多くの時間に関わり合ったからね。精神的にだってだよ。本意であるかは別にしてね。ボクには客観性という利点だってある。力になれるかもしれない」と言ってから彼にまつわる過去を思い返してみたが、商品として販売する価値のあるものなどひとつもなかった。錆びついたネジばかりがぎっちりと詰まった道具箱みたいにね。

「本当ですか。すっごく助かります。依頼された本人以外へ、こちらから協力を要請できない決まりになっているんです。ただ例外として任意の申し出に限り許可されているんです。嬉しいです。だって、お二人の関係に深く結びついた案件なんですから。ぜひ、お力を貸してください。できれば出会いから順を追って聞かせてもらいたいです。甘えてしまって、ごめんなさい。よかったら私の分のパンも食べてください」

手が鳴る方へ背く習性を熟知した飼い主が、反対側から追い立てることで、ま

んまとニワトリを檻に閉じ込めた。ボクは惨めなチキンだ。その誇りをかけて悪あがきはしないよ。羽根を減らすだけだからね。高らかに夜明けを告げてみせるさ。

「もちろん、任せてよ。やれるだけのことはやってみる。ただ過去を話す前にひとつだけ確認しておきたいんだ。いいかな。君は嘘みたいな本当の話と、真実を繕った作り話との分別がつくのかな。ボクがこれからやろうとしているのは、どちらかといえば、嘘みたいなおとぎ話なんだよ」

ボクは言い終えると髪を耳にかけた。その動作の過程で首を下げ、うっかりと彼女の目をのぞいてしまった。薄茶色の瞳で、灰色のボクが反転していたよ。

「安心してください。それが本当に過去の話なのであれば、どんな内容でもかまいません。たくさんのトレーニングや実習を受け、経験も積んできました。絶対的な自負があります。嘘だけでなく脚色や誇張だって、ひとつだって見逃

しません。集中して話せる環境だって作ってみせます」
おそらくまっすぐな眼差しを向けているだろうことが、語調から伝わってきた。有無を言わせぬ覚悟すら伴ってるだろうね。

「そう。わかった、信じるよ。ただし条件があるんだ。まず、報酬はなしにして欲しい。過去の話に値段がつけられるのは、いくらであったとしても納得できないからね。使い道に頭を悩ませるのもまた面倒だ。その代わり、話し終えても彼が戻ってこなければ、ビールを飲みに行きたいんだ。トマトとシラスにたっぷりレモンを絞ったブルスケッタも食べたい。もちろん君とだよ。本物かはわからないけれど、連れて行きたいトラットリアがあるんだ。それに、ボクには下心という大義名分が必要なんだ。それは大きな原動力になるからね」そう言うと返答も聞かずに目をつむり、ソファへ深くもたれた。すると、まぶたにエレクトリックな響きが波紋を生み、広がった。それに共鳴し、呼吸を続けていた過去が口を開いた。皮膚を刺し、動脈を流れ、全身を包んだ。再び目を

開くと、そこには近視が進む前の視界があった。

1 - 2

土管で地底へ潜るように、ボクはあの日に入っていった。

「やあ」と物悲しく親しげに彼は、左手をポケットに入れたまま振り返ると、挨拶を寄こしてしてきた。「遅かったね、勝手にあがらせてもらったよ」と言ったような気もした。でもよくわからなかったんだ。だって僕の部屋のリビングで、所在なさげにニコラスケイジが立っていたのだからね。超現実的なシチュエーションだよ。

「あ、はぁ」と接客業で身に染みついた条件反射でうっかり会釈をしかけた。縦にふり下ろしていた首を、着地寸前でなんとか横へ振り、困惑で首を傾げて

いるリアクションに旋回した。誤って他人の部屋へ入ってしまったのではないかと疑ったが、散乱するロックティシャツは、間違いなく自分の部屋のそれだ。ということはニコラスケイジに非があるか、僕の頭に非があるかに絞られた。どちらであったとしても深刻だ。週末営業のパーティを終えたばかりで、シャンパンとテキーラがちゃぷちゃぷと胃に収まっていたのだから、後者も捨てきれなかった。その他に考えられるとすれば、どうしようもない、と声がかれるまで繰り返し修飾すべき、職場の連中たちが仕掛けた悪戯くらいだ。むしろどうか、悪戯であってくれたならと思った。しかし期待を裏切るのが彼らの真骨頂なのだから、願ってしまったと同時に儚くも選択肢から外さなければならないんだ。

脈絡もなくキッチンのシンクが、ぼっこと大きな音を鳴らした。耳馴染みのあるゲップだ。水道管を細長い形状の未確認生物が住処にし、一日に決まって三回ほどゲップを鳴らした。僕としては音以外の実害を与えなければ、吸盤だら

けのグロテスクな容姿であろうと居住を許可していたんだ。クールな関係を保ってきたと言えるね。そのゲップによってニコラスケイジに声をあげ驚かせたのには、褒めてやりたくなったよ。グロテスクな君にね。餌でも買ってきてあげようかな。彼のおかげで自分の部屋が僕に戻ってきた。その矢先に、大きな男が話しだす様子となり、身構えた。

「やあ。本当に申し訳なく思うよ。勝手に上がりこんでしまってさ。ただ伝えるべきことを伝えるにあたり、そのタイミングを間違えてしまうと、取り返しがつかなくなってしまうんだ。わかって欲しいなあ、心から。僕は君に伝えるべきことを、然るべきタイミングで届けるために、ここへ来たってわけなんだ。ただそれだけなんだ。伝書鳩みたいなものだよ。そうだな、例え話をしよう。半熟卵をさ、うん、調理の行程で半熟であることがね、どうしても欠かせない料理があったと仮定して欲しいんだ。レシピの詳細は忘れてくれてかまわない。その際に、うっかり卵を茹で過ぎてしまったならばだね、それはもう単なる、

ゆで卵になってしまうんだよ。まるっきりの別物だ。無惨なまでに。逆もまた等しくだね、茹でなさ過ぎてもだめなんだ。僕は鍋の中の君が、ボイルドエッグにならずに済むようにしたいんだ。わかるだろ」

眉を下げ、長年連れ添ったペットが病気を患ったかのような、悲哀を込めて言った。ニコラスケイジお得意の表情だ。朴訥に雨に打たれるようなキャスティングでね。そんな彼から、わかるようでわからない例えを持ちだされ、おそらく文末では同意を求められていた。ボクは質問の意図をさぐる前に、彼の発音する「ボイルドエッグ」がカタカナ口調だったことと、靴を脱いで部屋に入っている律儀さに気を取られていた。がっかりするのもおかしなことだけれど。

そして小さな沈黙。

どうやら返事を待っている風情であった。僕はスモークが焚かれた視界のなかで、アガるか否かに主眼をおく人たちへ使う、曖昧な意思を社交辞令に詰め、

霧散させるような、職業病的対応をばきばきにへし折った。ここでギャランティは発生していないし、朝日の眩しい午前五時。暗闇でぼかしていた黒い部分を隠さず、断わりの言葉をぶつけてやった。

「そうですね。僕としても、非常に残念なのですが、言っておられる意味がさっぱりと理解できないのです。ただ悪い人ではないと感じています。あなたが悪意を、僕の部屋へ持ち込んでいないんだってね。物を盗るとか、痛めつけようといった類の目論見をお持ちでないと、初対面にも関わらず信じたくなります。わかりますか、すでに五十歩ほど譲ったところに立っているのですよ」

会話に余白を設けたが、返答はなかった。ただただ憐れみを含んだ、ピュアな眼差しを向けてくるばかりだ。僕はそれを無視し、さらに言った。

「で、もしもお祈りなどで気がすむのであれば、十分くらいはじっと耐えましょう。ダイハードなルックスに免じて、十五分まで特別に延長も許可します。聖なる物をまき散らしたりなどして、部屋は汚さない条件付きでね。ただ壺や

印鑑を買ったりはできません。新聞も牛乳も、アレルギ体質で受け付けません。先ほど話されていた卵は問題ありませんが、あまり上手に調理されていたとは思えません。余談でしたね。もし許されるのであれば、一時間以内にシャワーを浴び、布団で寝転がりたいのです。どうですか、偶然に壁を通り抜けてしまったわけでもなく、勝手に侵入したあなたへ、お願い申しあげているのです。ん、ちょっといいですか」

震える携帯電話のデェスプレイに視線を移した。ニックネームだらけの電話帳には五百件以上のアドレスが登録されてある。顔と名前が一致しない送り主からのメールを開くと、デジタルな朝露を想わせる眩しい絵文字が羅列してあった。心のなかで、慈しみだけを返信した。そして『ダイハード』はニコラスケイジではなく、ブルースウィリスではなかっただろうかと思った。ひょっとすると今日まで、二者を混同していたのではないかってね。それによる支障なんて皆無だったけれど。

「例えばだけれどね」と彼は、僕のペースなどおかまいなく、そして前触れもなく例え話をはじめた。

「想像するのも辛い内容だから、お気に入りではないんだ。ああ、口にするのも褒められた内容ではないね。ためらわれるよ。それでも言わなくちゃならないのが罪だよ。辛いんだ、僕だってね。何よりもわかりやすさを優先したんだ。わかって欲しいなあ。本当に悪く思うよ。どうか、少しだけ我慢をして聞いて欲しい」

ひとりで狼狽する彼は、深夜に垂れ流されている海外の通販番組の吹き替えを連想させた。大げさで、そこはかとない危うさがあった。

「翌日にデートを控えた君はテキーラを二杯だけで切り上げて帰宅するんだ。初めてのデートで、コンディションを整えたくなるほどの相手ってことだね。その気持ちが天にも通じ、当日は雲のない快晴だよ。予定時刻に起床した君は、

準備を万端に整えるだろう。シャワーを浴び、香りのいいヘアワックスをなじませ、お決まりの角度でスプレーを施す。さあ、コムデギャルソンの革靴を履いたなら、いざ出発だね。目的地は彼女の住む駅の、巨大なカメの銅像の前だ。デートコースから逆算すると、もっとも待ち合わせに適した場所だったんだ。そして運転をはじめると数分で君は、彼女がご機嫌になる音源を、車に積んでいないと気がつくんだ。初デートに挑むには、いささか攻撃的すぎる品揃えだってね。それですぐさま折り返して部屋へと帰り、ベックなんかをラックから抜きだして再出発するんだ。無事に彼女と駅で合流し、楽しいドライブのはじまりだよ。窓を開け『sexx laws』なんかを聞いているだろうね。はやる気持ちと昂る下心をぐっと抑え込み、カーナビの指示に従い、法定速度と交通ルールをきっちり守りながら走行する、模範的なドライバーだ。君なら間違いなくそうだろう。それでさ、それなのにね。ドライブの開始からわずか十分、差し掛かった交差点で、彼女の鼻に、鼻にだよ、ハエが止まってしまうんだ。無情にも。もちろんデートどころじゃない。そんな悲惨な仮定をして欲しいんだ」

彼は視線を天に預け首を振っていた。こんな不幸が訪れるなんて、とやりきれなさを全身で語っていた。僕は設定が細やかにして複雑な役回りの例え話を、仕事を終えたばかりの自室で、ニコラスケイジから聞かされている現実に、虚脱と憂鬱を覚えずにはいられなかった。

「ここからが本題なんだ。君はその、事故とでも呼ぶべきアクシデントの必然性を疑うかい。そこに至る過程で、君はいくつもの判断と選択を行ってきている。テキーラではなくシンガポールスリングを頼んでいただけで避けられたかもしれないし、ベックを諦めてブラックサバス一枚を延々と流す覚悟があったならば、少なくともこの地点で、そのハエが止まることはなかっただろう。それは事実だよ。でもね、起こってしまった後では、どれだけ悔いてもきりがないんだ。そして遅いんだよ。結果は揺るがない。あらゆる決定が下された後ではね。受け入れることしか残されていないんだ。もしも君がだよ、この瞬間からだね、ルイージになるという決定が下されたならば、君はもう、受け入れる

しかないんだ。緑は悪くないよ。美しい色じゃないか。そうだろ。グリーン、いいよね。あのさ、ルイージどう」

フォークボールよりも切れ味の鋭い変化と落差で質問が投げられた。ミットを手にしていなボクに受け止められるはずはなく、後ろへ転がっていった質問を取りに行く気力もなかったよ。投げ終えたニコラスケイジは、三振でゲームセットを迎えたような清々しさを湛えた表情をしていた。ボクはそんなにお人好しでなければ、性格も悪い。そして自分のことを利口だと勘違いできる程度に頭も悪いんだ。よって振り逃げのランナーがホームを踏んだって、質問に答えるつもりはない。疲れと酔いで眩暈に似た揺れを感じ、何か食べようと足元に転がっていたグリッシーニの箱を開け、ぼりぼりとかじった。

「あの、もう気はすみましたか」伺うつもりなど、さらさらなく尋ねた。

「たとえ気がすんでなかったとしてもボクがこの一本を食べ終えるまでに部屋

を出なければ、ややこしい局面へ突入します。ボクにとってもあなたにとっても面倒な展開にね。まあ、グリッシーニは口内の水分を著しく奪うため、簡単には飲み込めないでしょう。靴紐を結びなおすための猶予であり、最後の譲歩です。合理的な判断を促しているのです。ポッキーほど焦る必要はありません。どうですか、ムッシュ」歯に絡む小麦粉で詰まらせながらも、毅然とした態度を示した。

「うん。いいんだよ。君の反応だって、想定していたことだからね。今日のところは帰らしてもらうよ。ただもう、事実は覆らない。これは僕が望んだことではなく、〈ウエ〉によりディレクションされたことなんだよ。まあ、〈ウエ〉について多くは語れないんだけれど。知らないというのは存在しなのと同じだからね。それに〈ウエ〉の実態が問題の焦点ではないんだ。わかるだろ。大切なのは君が決定を遵守するということなんだよ。そして僕はそれを強く勧めたい。決まってしまったんだ。だからあらゆる選択の蓄積だとか、その正誤につ

いては考えないで欲しいんだ。さっきのハエの例え話のようにね。出口なんてないんだよ。ここで重要なのは受容だけなんだ。信じてほしい。フランツカフカの『虫』みたいにさ、目覚めると別の生き物になってしまうように、君はこの瞬間からルイージなんだ。ルイージとして存在しているんだ。これからはグリッシーニの代わりにキノコをかじる生活をしなければならない。ルイージとしての言動が求められているんだ。君の気持ちだって痛いほどわかるよ。一方的でわけの分からない要求だって思うだろう。もっともだよ。ただ法律が変わるのだって似たようなものじゃないかな。僕らの知らないところで、知らない人たちによって、知らない間に決定している。そして昨日まで制約などなく許されていた行為に、罰則が設けられたりするんだ。僕らの意思とは無関係に施行され、抗う方法だって判らない。あまりに無力だよ。それを受け入れるしかないんだ。どこまでいってもね。もう君は、ルイージになってしまったんだ」

ボクは指についた塩を舐め、完食をアピールしてみせた。心を込めて力説していた彼は小さく肩をすくめ、静かに玄関へ向かった。去りゆく背中によって、

寝つきが悪くなりそうな含みを置いていかれるのには納得がいかなかった。

罵り合いから耳を遠ざけ、聞こえないふりで過ごしていたのに、知らぬうちに同じ言葉で誰かを追い詰めているように、聞き流していた彼の言葉はボクのなかに沈殿した。

そうして僕は、ルイージになった。

4 - 1

喉の渇きにより虫歯を二本処置したボクに帰ってきた。一本目の奥歯は根元まで蝕まれていたから神経を取ってあったんだ。それなのに疲れがでると疼くのだから堪らない。掌はじっとり湿り、後頭部は重く、ぐったりとソファに埋もれたよ。背中には汗だってかいていた。まだ三十分ばかり話しただけなのに、

頭がぼんやりとした。喉に経験したことのない炎症もあった。室温によって、だれてしまったカスタードクリームみたいな倦怠さに包まれてね。ぼってりとしたんだ。話すべき残量から逆算すると、無謀なペースで体力が消費されているのは確実だったよ。キャラメルマキアートを飲むふりやなんかで、消耗することはできなかった。脂肪を蓄えた鈍い脳を使い、にわかに走りだしても、どろどろ溶けたぬかるみを這うはめになるんだよ。わかっている。それでも覚悟は、ふんわりと決まっていたよ。

「どうですか。疲れていませんか」ずいぶんと近くで声がした。ピアスのぶつかり合う音も拾えた。

「体が重く感じていませんか。初めて体験されたお客さんが、よく訴えられる症状なんです。科学的にも高い集中力を維持し、忠実に過去をなぞると、強すぎるマッサージに似た作用を引き起こすことは立証されています。だから副作用として揉み返しみたいに、痛みや脱力を感じるらしいのです。それでも継続

すれば深部のこりに触れ、心地よく解されていきますよ。大変なのはここでお終いです。安心してください。そしてお疲れさまでした。次に話したくなるまで、ゆっくり休んでくださいね。首のあたりが特に疲れていませんか」

彼女はマッサージに入る動作で、ボクの肩へ手を回してきた。買い取りのマニュアルに組み込まれたサービスの一貫なのだろう。ボクはそれをかわし、何事もなかったように座り直した。位置が少しずれたせいで背中の半分だけがソファに冷やされたよ。彼女は申し訳なさそうにするでもなく、納得した表情で首を少し傾けた。悪気はないんだ。ただ証明写真の範囲内を、他人に触られるのが極端に苦手なんだ。彼女の快活さが鼻についていたから、フォローはしなかったけれどね。核心を外しつつ、焦らしながら振る舞う寛容な態度に、隔たりを置いていたんだ。そこには狡猾と思慕がバランスよく配合されていたからね。

ボクはとにかく、感想を聞かせて欲しかったんだ。普段なら所感を述べられそ

うになるだけで、会話を踏み潰すというのにね。体への気遣いを寄こすくらいなら、印象だけでも伝えて欲しいと思った。なぜなら、ちゃんとやったからだ。ボクは誠意をもって秩序正しく従ったんだ。出会ったばかりでわけのわからない過去買収屋に対してね。黒い太陽の差す、気が触れそうなほど広大な土地で、必死にシャベルを動かし、固くなった土を耕し続けたんだ。わかるかい。照れ隠しの諧謔や誇張もなく、素直に向き合ったんだよ。ねじ曲がった性格で真摯な対応をするのは、ゆがんだ定規でまっすぐな線を引く以上に骨の折れる作業なんだ。それに対して意見を求めるのは、高望みをした交換条件ではないはずだ。それでも彼女は黙ったままキャラメルマキアートを握り、手のなかで遊ばせているばかりだった。ボクは不服を申し立てるように言った。

「どうかな、商品としての価値はあったのかな。君とクライアントの要望を満たすだけのね。もし無益なら正直に教えてもらいたいんだ。同じ徒労だったら彼が行きそうな本物のコーヒーを扱う店をしらみつぶしにあたって探す方が、ずっと健康的な汗を流すだろうからね」

しつこいようだけれど、ボクは芯からきちんとやった。いきなり連れてこられたキッチンで、包丁もろくに握ったことがないのに、ブータンノワールが食べたいなんて無謀なオーダーに対して、グミやチョコをまな板に載せたりしていない。手探りでもタマネギやニンニクを取り出して刻んだんだ。

「ありがとうございます。何の問題もありません。完璧です。こちらからの、わがままなオーダーに応じてもらって感謝しています。嬉しいです」

無言のまま声帯を使っていたのか、彼女が胸中を読み取る能力を会得しているのか、買い取りマニュアルの返答編に赤字で書いてあるのかはわからなかった。また邪推するのも億劫だった。だから言葉のままに受け止めた。こんな風に思うなんてたぶん、どうかしている。安堵し寛ぎまで感じていたのだからね。しかしその油断によって、気がつかないふりで、ずっとやり過ごしていた頭上の影を、しっかり捉えてしまったよ。注意を払い、見上げずにやってきたってい

うのにね。届きそうにないけれど、届かなくもない高さで追随していたのは知っていたさ。ずっとね。

「あの、何か買ってきましょうか。パンだったら駅の近くに老夫婦が営む薪釜でメロンパンを焼くお店があります。不釣り合いな製法に思えますが、クラストの香ばしさは絶品なんですよ。もう少し足を延ばせばドイツパンのお店だってあります。ここのプレッツェルの再現度は、本場と比べても遜色ありません。どちらも遠方からわざわざ行くようなお店ではありませんが、近所にあったら毎日がきっと、楽しくなるお店です。なんだかパンばっかりになってしまって、ごめんなさい。そうだ、すぐ近くのスーパーにしましょう。グレープフルーツはクエン酸を多く含むため疲れに効果的なんですよ。本当ならビタミン群の豊富な豚肉を焼かせてもらえると一番いいんですが、さすがに留守中に他人の家で火を使うのは気が引け……」

「いまは、君の声が聞きたくない。それに食欲もない。ただ隣に座ってくれていればいい」

うんざりと論し、ボクは会話を斬った。インタラプトしたんだ。見上げてしまった頭上の影は、蠢く物体となりボクを急き立てていた。断片を絶え間なく投下し、離してくれないでいた。そしてボクもまた、共時性の過去に浸かることを望んでいたんだ。一刻も早く目をつむり向こう側に戻りたかった。いかなる阻害もされたくなかった。ボクの言葉に彼女は待ち構えていた様子で黙ってうなずくと、テーブルの赤い手帳を取り、体が触れる距離に座った。ボクは彼女の細い肩にもたれかかり、鼻から長く息を吸い込んだ。

4 - 2

そしてまた、地底に潜るため土管へ入った。もっと深くへと。

薄い氷の膜が張っただけの眠りには、容易く亀裂が入り目を覚ました。もうこれ以上は眠れないだろうことが、ベッドの半径一メートルに醸されていたよ。起床とともに下痢や風邪を察知するみたいに。細胞から負けていたね。抗わず諦め立ち上がると、「なんていい朝なんだ」と声にした。皮肉ではない。心を込めてブラシーボ作戦、を実践しているんだ。効果のほどは怪しいけれど、自己催眠より有用な薬を知らないからね。自分の耳に言い聞かせていたんだ。

リズムよく動こう。そして外へ出よう。居心地の悪さには定評のある部屋だった。テレビや本棚にソファといった、おおよそ備わっているはずの生活雑貨は何もなかった。あるのは布団と服の山に石鹸、そして歯ブラシだけだ。滞在する時間が長くなるほど、多面的な悪化が約束された部屋だった。それは吸収する機会を増やすため、外出を促す役割として意図的に作りだした空間だ。いわばボクを排泄するための下剤だね。テレビはおそらく一生分は見てしまっていたし、つけてしまうと消せなくなるのがわかっていた。長らく彼らの植民地と

して支配されていたのだから。その頃はテレビを消すことによって、ボクの機能が停止するかのように錯覚していたんだ。テレビという容れ物を、肉体や脳に置き換えたりしていた。映像が乱れ故障したならば、病院の役割として電気屋に診てもらう感覚でね。リモコンを使って不意に背後から消されるなんて、銃殺のもっともリアリティがある仮想体験だと脅えていたよ。それでもニコラスケイジに押し入られた翌日なんかには、でまかせの騒々しさが懐かしかった。

コンタクトレンズを装着するより先に服を着替えようと、ぼやけた視界で積み重なった服を掘った。カーテンのない窓に照らされた埃が、ちらちら舞っていた。手に取ったのは襟の内側に水玉を隠した白いシャツと黒のパーカ。いつもの格好だ。ボクの服装には、ぶれがなかった。衣替えという概念すらない。無地のカットソーかティシャツに、無地のパーカかカーディガンを羽織るスタイルの一辺倒だった。それは履き違えたアナーキズムや個性とは無縁だよ。むしろ主張を排除し続けたなれの果てだ。何が悲しくて他人の名前や、解読できな

いメッセージ、無関係な数字をプリントした服を着用しなければならないんだってね。匿名性だけを求めて、しっくりくる服だけを選んでいたら、こうなっていたんだ。

だから緑の七分丈のシャツにオーバーオールなんて論外だった。過らせるに値しない、取るに足らない瑣末なトピックだ。そもそも、何故にルイージなのだろう。マリオや、ピックリマン、スヌーピーなどといった、数多のキャラクタからルイージがセレクトされ、ボクへと充てがわれた理由を知りたかった。どれにもなりたくないけれどね。押しつけられるのであれば、説明責任が伴ってしかるべきだろ。ぶつけどころのないクレームを鏡に投げながら歯を磨いたせいで、ブラシを握る手に余分な力が加わり、血が混じったピンク色の泡を洗面器に吐いていたよ。

ひとつずつなぞりながらルーティンをこなし、外出のための準備を整えていっ

た。予定はないままにね。いつものことだ。だから代わり映えのしない店に向かうことにした。日常性という枠に収め矯正されるような安息を求めたんだ。すでにその行動原理が非日常だとか考えだすと、抜け出せないメビウスリングがちらつきそうだったから、切り裂いて靴を履いた。

玄関の外側は紫外線の暗躍する鋭い昼間だった。細い日陰を渡り歩き、専門学校の並ぶ商店街を抜け、路地の突き当たりで階段を下り、ベルが鳴る木製の扉を引いた。挽肉をタマネギと混ぜ合わせ、団子状に成形した物体を焼く匂いと、メープルシロップの香りが混ざり、湿度を含んで鼻孔を湿らせた。ボクはこれを心底から嫌悪していた。いつかの街の、いつかの夕飯を連想させるからだ。それを免れるために、考え事に没頭している人を装いながら、鼻と手首を最短距離で結び、過分に沁みこませたクリスチャンディオールのオードトワレにくらくらするほど浸ってやった。臭いを防ぐだけでなく、長く寝かしつけている思考を昏睡させる狙からだ。

この一連の所作を経て歩く店内は、どの時間帯に訪れても混雑していた。特別に美味しいメニューがあるではなく、内装や備品もいたって凡庸だというのにね。類似した店舗は、各国の市町村に点在しているだろう。たまたま風水で絶好の条件を満たしているのか、エキストラを雇っているのか、香水で幻覚をみているのか、とにかく企業努力ではない別の力によって賑わっていた。例外なくボクも、それによって吸い寄せられている一人だよ。

「ねえ、いきなりメールで誘われてんだけど。これからカラオケに合流しない、だって。あっちも三人で暇してるみたいだよ」と嬌声をあげ、入口に近いテーブル席で女子高生が喚いていた。別の声が、被せるように高速で返答をする、「むりむりむり。ジャージだし、眉毛は消えかけてるし、髪も巻いてないもん。カラコンだって入れてないし。本当の自分じゃないから」。間髪を入れずに、また別の声が被せた。「なにそれ。ま、わかるけど。いいじゃん。かわいいよ」ボクはロマネコンティの空瓶に安価なワインを詰め、女性たちへ誇らしげに振

舞っていた昨夜の客のことを思い出したよ。彼女たちが飲んでいたものは、何と呼ばれる液体だったのだろうと。

イヤフォンを忘れたことを痛烈に後悔しつつ、カウンターの左から二番目に座った。慣れ親しんだボクの席だ。ここからの景色は、従業員や設計者を総動員したって、ボクより把握している者はいないと胸を張れる。向こう五年間は他の追随を許さないくらいにね。用途のない自慢話。すなわちゴミだ。椅子に腰を乗せると、いつもの配置にニコラスケイジ的な変異がないか、リキュールの瓶にはさまれたマシュマロマンの角度に至るまで確認した。すると水が運ばれるより早く、カウンターの右端から野太い声が飛んできた。

「これで注意するのは四十二度目になるね。カウントに妥協や狂いはないよ。どうか頼むから、僕の声帯と嗅覚を無駄遣いさせないでもらいたい。補うためのカロリだって保証しないのだからね。これで最後にしよう。この店へ、香水

を、振りかけてくるのは、やめてくれ。わかるかな、じゃらじゃらとキーホルダの束を鳴らせて歩くタイプの人たちがいるだろ。あれらと等しく、君の匂いが君より先に僕へと届くんだ。その数十秒後に君がそこへ座る。十八秒から二十六秒でね。その間に僕は、受動的に君を連想し、待つという態勢を強いられる。不本意なんだ。屈辱と名付けたいくらいにね」

手にニンテンドーＤＳを握り、顔を上げずに言っていた。それは彼の発声に、必要不可欠な装置みたいだった。

「やあやあ、なんだか君に会えて、ほっとしている自分がいるんだ。わからないだろうね。わからなくていいよ。気に止めなくてさえいい。君らしいことが喜びだね。とってもいい。おかわりがしたいな。コーラをご馳走してあげてもいいよ」

この太った男とは数え切れないほど顔を合わせていたけれど、名前すら知らなかった。一度だって会話が成立したことがないのだから無理はない。おそらく

正対したこともないね。彼の顔はボクの想像で出来上がっていたし、ビジュアルにはちっとも興味がないのだから都合がいい。お互いが言いたいことだけを投げ合っていたんだ。巨大で汗っかきな愛すべき彼とね。

彼は終わりのない成長期の食欲で、みるみると大きくなっていた。無地の赤いロングティシャツに、無地の赤いティシャツを重ね着するという、特有の斬新なコーディネートのサイズを、着実に上げながらね。そして片時も休むことなく同じ席に座り、同じ服装でゲームをしていた。よってカウンターの右端の椅子は、常に増え続ける彼の体重を支え続けなければならなかった。椅子としての喜びが負荷をかけられることに比例するのであれば、これ以上なく可愛がられていたと言えるだろう。ネコがごろごろお腹を鳴らすように、椅子はぎいぎいと鳴っていた。

「やけに不気味な様子じゃないか。バカにされているようで、とっても不愉快

だよ。君みたいに外見でもてはやされる連中は、すぐに大きな声で話したがり、笑い声だけでも響かせようとする習性があるね。注目を浴び、かまってもらうのに必死なんだ。そうやって不要に他者を巻き込みたがる。とにかく、言いたいことはひとつなんだ、反吐が出るほどつまらない物を見せびらかされるのに付き合っている暇はない。寂しいなら、仲間たちに慰めてもらうんだね」

「口にしたことがないから鈍感すぎる君は知らないんだね。この際だ、はっきりと言うよ。ボクはね、君を敬っているんだ。どんなに君から蔑まれ、疎まれたとしてもね。なぜなら、君ほどに愛嬌があるキャラクタは稀有だからだよ。ここで腐らせてしまうのはもったいない。子供から絶大な人気を獲得する、マスコットとしての資質が備わっているんだ。それは作ろうとして作れるものではないし、作為に子供たちは敏感だからすぐにばれる。融けたビニールや消毒液みたいに、有害な臭いが消せないんだ。君の曲線美は見事だよ。誰だってその背中にもたれ、眠ってみたいと思わずにはいられない。吸引力があるんだ。

もしもボクがおもちゃ会社を興したならば、真っ先に君をモデルにしたソフトビニール人形を作るよ。約束したっていい。卑下する暇があるなら、ここで契約書にサインをしてくれないかな」

彼は関節を使わずに脂肪だけで肩をすくめた。それを合図に、いつもの背の低い女の子が注文を取りにやってきた。小動物のような目をくるりとさせてね。この店に来るようになってから、注文は彼女にしか伝えたことがなかった。他にアルバイトがいないはずはないし、来店時間だってばらばらなのに、決まって彼女だった。カウンターの接客を割り当てられているのか、運命のサイコロが確率変動を起こしているのか、リピートさせるために顧客を分類し受けのいい異性を積極的に担当させているのか、理由は知らない。とにかくボクが彼女に好感を抱いているのは間違いなかった。罠であろうと経営戦略であろうと、頭からすっぽりはまってみせるよ。それを悟られないよう無愛想に、「やあ」とだけ言って手首を起こした。おそらくは空費だけれどね。それでも待っていた

なんて態度はとてもできないんだ。

「こんにちは。ちょっとお疲れの様子ですね。顔色がいつもより優れないですよ。絶対に栄養のあるものを頼んでくださいね。じゃないと、オーダー通しませんから」

彼女は三角の耳の先端に付いたシルバーピアスを揺らし、無邪気に笑ってうつむくと、斜め掛けにしたワンショルダーのポーチからオーダー票を取り出した。頭のてっぺんで束ねられた、赤茶色の髪も遅れて誘われた。それから履き慣れない靴を確かめるように視線を落とし、小さく踵を浮かせ爪先立ちになって、ボールペンを握り注文を伺う準備をした。ボクはこの仕草がたまらなく好きだった。きらきらとしていたんだ。女性には二日酔いみたいな胃のむかつきを覚えていたけれど、彼女だけは違った。「絶対連絡してよ、約束だから」などと囁きかけ、たいていはその数分後に、出会ったばかりの別の男に腰を抱かれキスをしていたりする。ちっとも珍はしくない。追い打ちをかけるように、その男

の腕のなかでボクを見つけ、ウィンクを送られたりだってするよ。仕事中のよくある話。そんな匂いだけで拒絶するほどに、女性観が毛羽立っていたボクにとっても、彼女だけは例外的な存在だった。

「そう。少し寝不足ぎみかもしれない。悪い夢にうなされすぎたんだ。まあ、いいや。コーラとどうしようかな」と言ってから、食欲がないことがわかった。どのメニューを頼んだって大差はないとね。だから適当に開いたページから、やっつけて選んだよ。

「はい。コーラとキノコパスタですね。キノコ、多めにしておきますからね」と彼女はオーダーを復唱し厨房へ入っていった。ボクにとって初めて注文するメニューだった。それが原因なのか、右端の彼が、上体を大きく横へと動かす気配がした。マリオカートのカーブで画面につられただけかもしれないし、ロックマンで竜巻を飛び越えるためのジャンプにつられたのかもしれない。意味

のない繰り返しだ。問題はその動作によって、キノコを頼んでいる、という事実に気がつかされたことだよ。食べるとすぐに体が二倍に急成長するかもしれない、なんて心配をしているのではないんだ。無意識のうちに自分が、ルイージ化しているのではないだろうかという疑念が癪に障った。ニコラスケイジの言っていたカフカの『虫』みたいにね。知らない間にどんどんと侵食され、思考まで乗っ取られるのではないかって。さらに「君はブルースリーに似ているね」と言われ、「そんなことないよ」などとそっけない返事をしておきながら気を良くし、髪型や服装にブルースリーのテイストを取り込んでいく行為にも思えた。これは前者よりさらに酷く、目も当てられない有り様だ。

どちらも思い過ごしであると言い聞かせるため、頭を使わず体を使えと、エキセントリックな方法で水を飲んでみたよ。人差し指と中指でコップを挟んで持ち上げ、傾斜によって溢れる水を口ですくったんだ。もちろん零れる水よりも激しく、挙動不審さがテーブルに転がったよ。それでもルイージがやらないで

あろう狂愚がよかった。気管へと吸い込まれ、大きくむせてしまったとしてもね。その様子に、耐えかねると言わんばかりに巨体が話しかけてきた。

「君が僕の手の中でどのゲームをプレイしているのかと覗き込むのは、失礼極まりない無礼な行為だよ。それに僕はそもそも詮索を、するのもされるのも嫌いだ。だから君がその場所で何をしていようと、他者へ被害を与えなければ勝手だと思う。ただ今日の君は少しばかり、おかしすぎるよ。これは質問ではなく変化に対する指摘だから。そしてコーラばかり飲むのは体に良くないよ。これは忠告だね」

大きな男はミントの葉が浮いたアイスティを飲みながら言っていた。彼は体躯とは裏腹に、甘い物や脂っぽい物を好まなかった。疾患により血糖値をコントロールしているのか、信仰上の理由なのか、純粋に味覚として好まないのかはわからない。そして興味があるはずなんてない。

「それは親切に、栄養まで心配してもらってすまないね。ただし、フリスクをたくさん食べているから大丈夫。栄養は足りているよ。さらに指摘や忠告まで頂戴し感謝するよ。ボクからはお返しに、恩寵や訓示を送りたいところだけれど、あいにく持ち合わせてはいないから、質問をしてもいいかな。君はいついかなる時もその場所を離れないけれど、それは君の自由意思によって決定された行為なのかな。それとも君がそこへ座ることによって、チリのトウモロコシが豊作になる、みたいな超自然的な祈祷の類で時給を稼いでいるのかな。それとも目に映らない凶器で脅され動けずにいるのかな。どうか教えて欲しいんだ」

ボクはできるだけいつもの調子で話すように心掛けた。すると普段の自分がどのように話していたのか、ちっとも思い出せなくなってしまったんだ。逸れてしまった道から脇へと迷い込み、目的からぐんぐん距離が開いたよ。手直しができないままに、あらぬ方角で彷徨ってしまったんだ。それでも止めることができなかった。「さらに君はいくつものゲームを所有しているよね。そのどれか

ひとつをゲーム本体に差し込みプレイしているはずなのだけれど、使われていないゲームのキャラクタたち、つまりはピカチュウやタマネギ戦士たちはどうしているのかな。君の手の中でしか存在できないならば、酷すぎはしないかな。同情すら覚えるんだ。どうせクッションになるなら女子大生モデルのソファに寄りかかるクッションになりたい、みたいな所有者についての話ではなくてさ」

ボクの意思を離れ口が動いていた。それによりカウンターには、不自然な空気が一枚板となって寝転がってしまったよ。店内音楽の古典的アメリカンロックが転調したが、その程度では何も変わりはしない。自己陶酔したギターソロへ移行してもね。ボクはやり場をなくし、左側の壁に掛かった、パリのカフェでコーヒーを飲む、斜視のおっさんのポスタを見ていた。こちらのことなどおかまいなく、コーヒーを飲み続けるばかりであった。

キノコパスタとコーラがボクの前に置かれていた。たぶんあの女の子が運んで

きてくれたのだろうね。ボクは食欲のなさと相まって、ずいぶんと滅入りながらフォークを握り皿を眺めていた。居心地の悪さをごまかすための作業として、キノコをスプーンで皿の隅に寄せていった。炒められたキノコで山を作ってから、炒められたタケノコで里を作ったらどうなるかについて三株分だけ時間を割いたりもした。すると右側から唐突に野太い声がやってきた。

「ツタヤへ行って『トイストーリー』って映画を借りてごらん。おもちゃ箱をひっくり返したような、夢とファンタジーが詰め込まれた映画だよ。陳腐な宣伝文句ではなくてね。君はいささか疲れすぎているようだ。少し休んだほうがいいよ」

どうやらそれは先の質問に対する答えらしかった。ひょっとするとボクの言葉は寄り道をしたため、ずいぶんと遅れて彼の鼓膜へ届いたのかもしれない。物理的ではない相対性理論によってね。ボクは返事をせずパスタを食べはじめた。キノコを除けつつコーラで流していった。皿が空っぽになると、お礼を言った。

「ありがとう。よかたら今晩、お店へ遊びにおいでよ。気が向いたらでいいからさ。とっても盛大なイベントの夜なんだ」

ボクの誘いは会計を終えベルを鳴らしドアを開ける時もまだ彼の耳には届かず、退屈な店内音楽だけが雄大に歌っていた。あと何曲かの後に、彼からの返答があるのかもしれない。ただそんなことなど、歩道の信号が点滅をはじめた時点で、ボクのポケットからは、いとも簡単に落っこちていたよ。すぐさま、迫り来るトラックやタクシーのタイヤによって、跡かたもなく踏み潰されてしまうだろうね。これで彼と今生の別れになってしまったとしても、後悔や悲しみはなかった。そういったものは、ずいぶんと遅れて、まとめてやってくるんだ。これまでも、これからも。

近づくものを撒き散らし、蔦をよじ登るように帰っていった。

4 - 2

わずかな息継ぎになるとわかりながらも、ボクは語るのを止めた。遠くへ行く前の短い挨拶を交わすためにね。彼女が言っていたとおり、導入部ほどの疲れはなく回復の兆しがあった。無意識に手を入れたソファの継ぎ目で、ボールチェーンのネックレスに触れた。ずっと前になくしていたのかもしれない。引き抜き首からさげてみた。冷えた金属が心地よかったよ。ペンダントトップのコインが、かちかちと滑り骨に響く音に合わせて、ぜんまいを巻かれる要領で体を起こした。

目を開くと街は夕景に包まれていた。ビル群から届けられる躍動する騒々しさは、解放に近づいた余裕から軽やかだった。セル状に連なるマンションの部屋はそれぞれに、浴槽を掃除したり、夕飯の支度に追われたり、子供たちがランドセルを下ろしたりと生活の佳境を迎えていた。街全体が、活発に循環してい

た。それらが気体となって漏れだし、ボクの前をうっすらと、かすめていったんだ。

「どうですか。さっきよりも、ずっと良さそうですね。今回もクライアントと私の要求を、しっかりと満たしてもらっています。ずっと聞いていたくなってしまいました」

彼女はボクの方へ大きく傾き、視界へ割り込んできた。右側の髪が垂れ広がり、三角形の耳が現れた。赤い手帳やレコーダはどこかに閉まってあった。

「そうかもしれないね。まるで初めて自転車に乗れた感覚だったよ。君さえよければ、すぐにでも漕ぎだせそうだ。それもとても長い距離を走れる。ただ少し喉が渇いたんだ。水分の補給に立ち止まっただけだよ」と言ってから、テーブルのキャラメルマキアートと目が合った。一滴も減ってはいないけれど、ボクにとってはないのと同じだった。彼女から再びキャラメルマキアートを勧め

られるよりも早く、バスルームにストックしてあるペプシコーラを取りに行くことにした。ソファの後ろの冷蔵庫を開け、彼女の前でキャラメルマキアート以外の飲み物を口にするのは、偽物だときっぱり拒絶したオジサンよりも、取り繕った分だけ負けた感じがするからね。

「疲れてはいないけれど、寝起きみたいですっきりとしないんだ。続きを語るためにも顔を洗ってくるよ。しゃんとしたいからね。少し待っていて」

断りを入れると席を離れ、バスルームの蛇口をひねった。そして洗濯機の横に天井まで届きそうな高さで乱雑に積み重ねてある、ノンシリコンシャンプーの詰め替えパックや、トイレットロールなど日用品の山を、洗面台の側へと切り崩していった。リビングに音が届かないように、そして彼女の音を聞き漏らさないようにと、鼓膜に神経を集中させながらの作業だ。どうにかペプシコーラの段ボールまで辿りつくと、洗濯機にもたれてしゃがんだ。缶を抜きだし、太ももにはさんでプルトップを起こした。しかし想定していたよりもずっと生暖

かくって、手が止まってしまったよ。乾きごと萎えさせられたんだ。熱を帯びた配線に寄り添い保管していたせいだろうね。うんざりとして洗面台へ缶を置き、代わりにヘアスプレーを取り上げると髪に吹きかけた。目に付いたから。それだけのことだよ。スプレーは勢いよく噴霧し、バスルーム全体をケミカルな青リンゴの香りにした。来た時よりも無秩序なバスルームで、とりとめなく鏡を覗き身だしなみを整えた。

すると幻聴のように、8ビートのハウスミュージックが頭のなかに流れてきた。ボクはそのリズムにのって、歯ブラシを入れた棚を開いた。そこで請求書が束になって刺さっているのを発見した。どんないきさつで、水を浴びてしまうような所に、未開封の手紙や封筒を持ち込んだのかわからない。手に取り目を通すと、三か月分のガス代と電気代、年金や火災保険などが揃っていた。それらをまとめて掴みあげ、洗濯機に放り込み、フローラルな液体洗剤と柔軟剤を規定の倍量ほど入れ、標準洗いのボタンを押し、爽やかな芳香の紙屑にしてしま

いたかったが、断念した。やってしまってからの厄介さが、衝動を食べたんだ。面倒だってね。しかし思考だけは、洗濯機のボタンを押した側で世界を進めていたよ。ごろんごろんと響かせながら請求書や国勢調査、風俗店の広告を混ぜこぜに回転させていたんだ。鳴りやまない８ビートと共鳴するように。リズムを刻み作動していたよ。それは、あらゆるものを飲み込み浄化する装置みたいにね。ボクは視覚的には止まっている洗濯機の脱水を見届けると、コーラをひっくり返し排水溝へ流した。しゅわしゅわと飲み込まれる茶褐色の液体。たっぷりと一人遊びを堪能し、蛇口を閉じてリビングへと戻った。

照明器具を必要とする部屋の翳りが、心地良く衒いを隠してくれた。ソファに腰を下ろすと、すぐ側に彼女の温もりがあった。ボクは声もかけずにぼんやりと、見慣れた窓に切り取られた景色を眺めたよ。遠くから視点を近づけていき目の前のオフィスビルで折り返し、また少しずつ遠くへとフォーカスさせた。四度目で折り返し地点をやり過ごし、視点を部屋のなかまで運んだ。

彼女が小さくボクの肩でうなずいた。語りだすための合図を送っているのだろう。そこでふと、もしもこのまま彼女がどこかへ行ってしまったら、もう二度と会えないだろうなと考えた。過ったんだ。たったそれだけのことなのに、ぎゅっと胸が締めつけられたよ。ビジネスとしての付き合いなのは理解しているっていうのにね。これも顧客へのサービスであり、仕事なのだ。知っているよ。彼女は立派な営業なのだから。ボクは目を閉じると、彼女の手の上に自分の手を重ねた。握るでも置くでもなく、手品師が赤いハンカチをかけるように、そっと。体温の低さが伝わってきた。

もうこのままでいいやと思えた。古く固まった絵の具を水で溶くように、心が解れたんだ。いつ以来だか思い出せないね。さすがはプロの話させ屋だ。この刹那を映したフィルムを繋いだだけの退屈な映画のなかで、いつまでも演技を続けていたいとまで感じさせるのだから。しかし上映わずか三分で、あっさり

と終焉を迎えた。バスルームに移動した時から、いや、こちらへ戻ってからずっと、過去へ帰りたかったんだ。フィルムを切ったハサミは、ボクが握っていたよ。映写機はからからと回るばかりだ。

彼女の手を一度だけ力を込めて握ると、色の違う土管に潜った。

8 - 1

人工的な極彩色の蜘蛛の巣を、塗装した綿を千切り作っていた。隣では色画用紙に蛍光塗料で禍々しい文字を書いていた。ナイトクラブにおいてハロウィンは重要な位置を占めるビッグイベントであるため、スタッフ総出で分担し準備を進めなければならない。非現実的な異空間を非現実的に装飾するのは、ひっくり返って現実になりそうだが、混沌の渦が大きくなるだけだった。

歳下の先輩がリーダーらしく指示をだしている。それに従う者と、陰口をたたく者と、茶化して嘲笑う者。疑心暗鬼を抱えながらスクラムを組む、体育会系の縦社会だ。人生の迷路で出口を見つけられなかったり、多重債務を抱えていたり、ゲイ、学生、コネ探しなど、煮出せば灰汁だけで鍋を満たしそうなメンバーで構成されていたんだ。彼らを集団として結束させていた唯一の絆は、女性というアメだけだ。

もちろんボクだって例外じゃない。動機とは無関係に、相似した形をしていた。お好み焼きを作るために混ぜていた小麦粉が、材料が足りないからと方向転換し、砂糖を加えクレープとして焼き上がるように。ボクはただのクレープではないんだ、お好み焼きとして作られはじめたのだから、なんて主張は生クリームとバナナに覆われ、誰の耳にも届かないよ。段ボールへ色を重ねていく単純作業に追われながら、クレープとして仕上げられるまでの工程を思い返していた。ここでボクが、ピエロと化すまでを追思したんだ。

オールバックとスキンヘッドの二人組に履歴書を渡し、鋭い眼光に反する丁寧すぎる言葉遣いの、薄気味悪い面接を終えると、その夜からスタッフとして働くこととなった。任されたのは、ひたすらにゴミを拾い続ける仕事だ。レコードに針が落とされ、古い倉庫の重い鉄の扉が放たれると、ぽつりぽつりと人が集いだす。音の起伏に呼応し、群衆が生まれ、人々はみだりにタバコの灰や酒をこぼした。僕はそれを可能な限り拭い、ワインクーラーへ吸い殻を積もらせなければならなかった。苦笑いを持続し、かき消されないように声をあげ、決められたルートを延々と回った。そして朝が近づき音が止まると、人々は何事もなかったかのように帰っていった。砂糖に群がった後のアリみたいに、ポケットへ一片の甘味だけを忍ばせてね。疲労と興奮でぐちゃぐちゃだったけれど、彼らが食べ散らかした場所を清掃し、翌日のアリたちを迎える準備が僕には命じられていた。

それらの受け流し方を模索していた一週間後のことだった。フロアがまだ疎らな時間に、これまで出会った友人や交際してきた恋人たちとは毛色の違う女性

が、警戒する隙も与えずにパーソナルスペースへと距離を縮め、声をかけてきた。ためらいのない間合いの詰め方でね。

「ねえ、私と秋のデートをしませんか。明日暇なんだ。ねえ、そこのデパートの前で、お昼に待ってるから」

そう言って軽く胸を僕の腕にあて、フロアへと消えていった。スタッフルームで交わされる猥雑で淫らな脚色ばかりの話題と、自分は無縁なのだと思っていたよ。そこへ前触れもなく、コミュニティの内側から招待されたんだ。始終を目撃していたバースタッフが、ご祝儀として鮮やかなブルーの液体をカップに注ぎ寄こしてきた。それを一息で飲み干すと、背中に悪寒が走った。高濃度なカクテルだった。手荒な歓迎に空のコップで応えたけれど、夜が深まるに連れて回りだすアルコールと、それを自制し職務を全うしなくてはならないという、ぎりぎりの攻防戦を強いられる羽目になったんだ。それでも自然と笑顔でいられたよ。普段なら卑しめる人たちとも、ハイテンションで言葉を交わしリアクションができた。いんちきなトリックに引っかかったみたいにね。

そして翌日、僕は指定されたデパートで彼女を待っていた。いつもなら寝ている時間だったけれど、アラームを必要とせずに待ち合わせの十分前に到着した。それは彼女が魅力的だったからでも、性欲でもなく、噂だけで膨らませていた架空の街に足を踏み入れる高揚が理由だ、という解釈で納得したことにしたんだ。口約束も甚だしい取り付けを守り、名前も年齢も連絡先もわからず、顔だけを知っている相手を待つのは、ひどく違和感があった。座っていた鉄の柵ですらね。いつまで待つべきかわからないから、アイポッドでランダムに再生し、次にマイケルジャクソンが流れたら去ろうと決めた。そんな自分に課したルールを、二度ばかり改訂した頃に、大きなサングラスをかけて彼女が現れた。

「わあ、本当に来てくれたんだね」と屈託なく話しかけてくる姿は幼く、闇のなかでライトを浴びていたのとは違っていた。それは彼女にとっても同じだったらしく、「なんかやっぱり夜とは違うね」と言った。がっかりしたニュアンスを含んでいるのではないかと気になったが、掘り下げたところでジャガイモだって出てきそうにないから、聞こえないふりをした。

「じゃあ、秋のデートに行きましょうか」と勝手に彼女はくるくると浮かれ僕を導いた。半歩先を進む彼女を、遅れて追った。それでもまだ、知り合いと歩いているという感覚ではなかったよ。行き交いすれ違う、顔や色がはっきり認証できない人をピックアップし、乱雑に色鉛筆で色を塗ったみたいな、即席の彩りを帯びていた。それでもいいと開き直れたのは、秋のデートには申し分のない天候だったからだ。彼女は肩をだしたシルク素材のトップスに、白のカーディガンと赤いミニスカートを合わせ、足元にはリボンを結んだ白いヒールを履いていた。僕は白のシャツに、黒いカーディガンを羽織っていた。仲のいい恋人同士のようだったかもしれないね。

そのまま二十分ほど歩き続けた。特に会話らしいものはなく、彼女がいくつか質問をしてそれに僕が答えていた。とても関心が強い様子で相槌を打たれるほどに、むしろ興味がないように思えたよ。しばらくすると、大きな公園に着いた。家から電車で五駅のところに、こんな場所があるなんてちっとも知らなかった。秋のデートには打ってつけのロケーションだった。

ランチボックスや飲み物を持っていない僕たちは、子供を連れたママや、休憩している会社員、ランニングする老夫婦などに紛れ、秋を吸い込み歩いていた。紅葉したイチョウや名前も知らない無数の落ち葉を鳴らしながらね。それでもなぜだかいつもと違って映った。風景だって別の顔をして、こちらを見ていたよ。

なだらかな起伏がある芝生で腰を下ろすと、彼女は大きな帽子をカバンから出して被った。僕は横に並んで座り、浅いことばかりを狙って話した。砂山の真ん中に小枝を立て、倒さず交互に砂をかき集める遊びみたいに、核心に触れないように注意していたんだ。

しばらくそれを続けていたけれど、夜型の生活を送っていた僕は、久しぶりに浴びる太陽光と寝不足で疲れてしまった。だから名前も知らない彼女の太ももで横になった。彼女の肌からはラベンダーの香りがした。この日初めての沈黙だ。はしゃいでいる子供たちの声だけが遠くで聞こえていた。そしてぽつりぽつりと寝転がる僕に、彼女は重たい話をした。破局の話だった。身体的な欠陥

や、精神の衰弱、自傷行為だって含まれていた。それは僕を締めつけそうになったから、寝返りを打って位置を変え、彼女の太ももで右耳を塞ぎ、左耳には腕を押しあてた。そして深海魚のような顔をした後輩とのドライブを思い返すことにしたんだ。彼女の肌からラベンダーの香りは消え、土の匂いだけが鼻に残った。

日が暮れて風が冷たくなると手をつないで歩いた。それから薄暗い照明の店でパスタを食べた。酒を飲み、彼女の部屋に行った。名前も知らない彼女のベッドには、見知らぬ彼氏と遊園地で肩を組み、ピースサインを向ける写真が飾ってあった。僕は写真に向かってウィンクをした。そして彼女とベッドで寝た。

何も、何も生まれない関係。

翌朝は彼女の出勤に合わせて目を覚まし、連絡先を交換しないままに別れた。だから冬のデートや春のデートはなかったよ。一度だけ店へ来ているのを見かけたけれど、気がつかないふりで通り過ぎた。色鉛筆で塗られた色彩は褪せ、灰色の集団の一人になっていたからね。彼女は夜が盛り上がる前に、涙を浮か

べ帰っていった。汗やアルコールでべたつく床を掃除している頃に着信があり、数分後にメールがあった。イベントが終わった後の、夕立を待ち構えるアスファルトの匂いを放つフロアで、僕はどちらも開かず消去した。

街はすでに朝の顔を浮かべていたのかもしれないが、この場所には人工的な灯りしかなかった。夜だけを永遠に垂れ流していたんだ。得体のしれないものが、むくむくと僕の胸で膨れ上がりそうになった。その対処法として、ビッブルームでグラスを拭きあげていたバースタッフを捕まえ、先日と同じブルーの液体を頼んだ。彼は返事もせず口の端だけで笑い、カップに注いでくれた。匂いだけで前回の記憶に体が怯えていたが、無理やりに押し込めたよ。

そんな風に、なし崩し的に僕は、それらを日常としていったんだ。携帯電話を片手に電車へ乗りデスクでエクセルと睨み合うように、クロスバイクで通勤し制服に着替え笑顔を作るように、弁当箱をぶらさげ迎えのバンに運ばれた現場で汗をかくように、僕は女性と戯れていった。相手を替えてはコピーペーストし、同じ轍を踏んだんだ。さまざまな駅の改札をくぐり、さまざまなレイアウ

トの部屋に行き、さまざまなシャンプーの香りを髪に持ち帰った。誰も好きじゃなかったし、誰にも好きと言われなかった。

カーテンのない自室へ招き入れ、美しい時間に音楽を流し、割れ沈む地盤に引き裂かれると脅え、冷房の効きすぎた部屋で布団に包った。マライアキャリーを崇拝する一重まぶたのよく似合う女の子が、アイポッドをスピーカにつなぎ、うっとりしながら、「私の神よ」なんて言うのを聞いただけで、分かち合えないと着信を拒否した。

どれもこれも茶番だ。彼女たちの求める男を演じる三文芝居の主役は僕で、物語の脈略に関係なく結末を迎えたよ。最後のプライドとして、あらゆる経費は僕が支払っていた。何の慰めにもならなかったけれどね。これらは夜の仕事の通過儀礼だと言い聞かせていた。矛盾だらけだったから正当性を探す手間は省けたしね。

そしてどんどん剥離し乖離するものたちを痺れさせるために、アルコールを飲んだ。寿命を弄ぶような飲み方でグラスを空にしていった。テキーラを軸とし

アルコール度数の高いお酒ばかりを好んで飲んだよ。姑息にスタッフたちを出し抜き女性を手にしていった。それらの噂が広がり、僕は無類の女好きとされ、心のないお調子者として扱われた。いつしか立派なピエロになっていたんだ。空気を読む嗅覚だけが、特出して開花したよ。いつでも彼らが望んでいる僕を演じ分けられたね。ここは自分が居るべき場所ではないという、深遠な溝にかかった細い平均台を、ムーンウォークで渡ってみせられた。誰にも心は開かなかったのに、どんどん彼らは僕を受け入れてくれた。「お前ぶっ飛んでて最高だよ」とこいつくらい能天気なら楽だろうと思える、真っ黒に日焼けした先輩に肩を組まれ言われたって、ぞっとしながら片目を閉じられたんだ。

「おい、オープンまで一時間を切ったぞ。気合い入ていけよ」

虚構の国の王様が怒号をあげ、回想は打ち切られた。スタッフたちは、形式的に大きな返事をしていた。ボクは塗料が付着した手を雑巾で拭ってから、声の主を振り返った。

そこには背中に棘の付いた甲羅を背負う、クッパがいたんだ。でっぷり突き出た腹に短い脚と大きな口は、クッパのコスプレに適し過ぎていた。高熱がでると決まって見る悪夢みたいで、変な汗がどっと湧いたよ。ボクは作業を放棄し、急いで階段を上がると、ピップルームのカーテンをくぐってストックスペースに入った。うす暗く埃っぽい空気が汗に絡んできた。モエシャンドンの段ボールに座り、適当に手を伸ばした箱からレッドブルを引き当て飲み干した。そのまま立て続けに三本を空にした。カフェインで心臓がばくばくとしていたよ。落ち着きを取り戻すため、思考を鈍化させることにのみ集中した。それでも厄介な亀の国の王様は、簡単に残像を消させてはくれない。まぶたにこびり付き、デフォルメされたタッチで口の端を吊り上げ牙を剥いていた。赤いグラデーションの背景から見下す構図でね。ボクは自主的に虐げ、火に油を注ぎ燃やし尽くし鎮火する方法を選ぶことしにした。いつものことさ。パチンと指を鳴らし彼を呼ぶ。

さあ、出ておいでよ、ニコラス君。

「やあ。君から呼んでくれるなんて嬉しいな。すっかり嫌われていると感じてたんだ。本当にね。クラッカを鳴らしたいほどに浮かれているよ。赤飯を炊くって表現の方がしっくりくるなら、言い換えたってかまわないんだ。めでたいことには違いがないんだからね。そう、僕はね、もっと君と親密になりたいんだ。心からね。ためになることだって、少しぐらいなら伝えられるはずだよ。こんな僕だってきっと役に立てる。わかるだろ。でもどうしたって言うんだい、ひどく落ち着きがなさそうに見えるよ。鍋で卵を茹でたまま、火を消さないで家を出てきてしまったのかな。キッチンへ行って、ガスを元栓から止めてきてあげようか。かまわないんだ。何だって言って欲しいよ。思わぬところで、クッパに遭遇した場合だってね。ちっとも心配はいらない。ただの仮装だよ。鎮まるべきなんだ、ルイージ。隣にいた黒服の幹部は亀仙人の格好をしていただろ。そいつに怒鳴り散らされていたのはジャックスパロウだ。彼とこっそり付

き合っているエントランスのスタッフは初音ミクだった。誰もが君と同じように割り当てられたキャラクタを、限定的に演じているだけなんだ。伝わって欲しいな、意味ってやつがね。君のいる場所は、少しばかり混沌とし過ぎているだけなんだ。たまたまその針が振れただけさ。無関係だよ。それに動揺からは何も生まれないんだ、ルイージ。いいかい、僕が言うまでもなくね。理解して欲しいんだ。友として言ってるんだよ」

「君の口内にね、ぱさっぱさの黄身だけを詰め、水分を奪い、黙らしてやりたいよ。友としてね」と声にださずに発し、わざとらしく缶を潰し立ち上がった。心に存在する神や英雄、または悪意や業を具現化し、対峙していた「君」が実は「僕」だったなんていう、使い古された所へと着地させようとした自分への嫌悪感が、エナジーとして翼をくれたよ。ニコラスケイジはニコラスケイジだし、ボクはボクだなんてね。また餅は餅だから、トマトソースを塗ってチーズを乗せてもピザにはならないよ。

黒く重いカーテンを持ち上げビップルームへと出た。高級を装ったソファと、デザイン性が高そうな机とが並ぶ、張りぼてだらけの空間だ。しかし夜となり、フロアが熱気で蒸し返す頃に、補正した照明のもと座り込むソファは別格だった。付加価値と羨望によるのか、座る人間によるのか、専属のアルバイトがなかに入り支えているのかはわからない。安っぽいスプリングがぎしぎし響くソファで、上体を横にしてハロウィンの装飾を仕上げに戻るタイミングを窺っていると、ボクを呼ぶインカムが飛ばされた。

「スタッフルームに来てくれ」

クッパ様からの命令だ。彼が営業時間外にインカムを使うことは非常に珍しい。いつもならば三席しかない事務所の奥のデスクで、データやグラフを並べているか、ユーチューブを鑑賞し過ごしていた。ずんぐりむっくりの巨体に、ぴたぴたと密着する素材のティシャツばかりを好んで身につけてね。

階段を下りる足取りは重たかった。トラブル対策という名目で、全方位を網羅した防犯カメラが無数に設置してあった。事務所に並べられたモニタに、うなだれレッドブルを飲む姿が映しだされたのを、発見されたんだとわかっていたからね。記憶を巻き戻し再生しても、単に怠けているだけだったし、正直にニコラスケイジと対話していたなんて言うのは、新手の新興宗教の舞踏を披露するようなものだ。それならば、おにぎりを鼻の穴から食えといったスタイルの懲罰をくらう方がましだったよ。心底うんざりするけれどね。

スタッフルームに吊るされたカラフルな衣装をかき分け、いつもの席で待ちかまえるクッパ様の前にでた。直視すると吐きそうだったので、ばれない範囲で視線を外していた。フックに掛けられてあるレゴブロックのキーホルダに注視し、分解と組み立てに脳内で興じていた。

「申し訳ないんだが」という、意外な切りだしによって思わず視線を向けてし

まうと、口を裂いたメイクが薄気味悪く笑っていた。胃酸がどっと溢れるボクをよそに彼は言った。

「お前の衣装が足りなかったんだ。手配ミスでな。せっかくのハロウィンなのに、すまんな」

「……全然、問題ありません。わかりました。では、どんな服装で働けばいいですか」

「お前はな、お前のままでいいんだ。いつものお前で働いてくれ」

そこは制服でいい、と答えればいいんだよ。クッパだけじゃ飽き足らず、哲学者やセラピスト気取りか、と憤慨したかったけれど無言でうなずき彼の前を去った。防犯カメラで俯瞰すれば衣装がないことにショックを受け、言葉を詰まらせたように映っているのかもしれないね。ボクはそのままロッカールームに立ち寄り、クリーニングから返却された黒シャツに黒のタイを結び、黒のスラ

ックスと黒い皮靴に履き替えた。どこまでも黒く闇に溶け込む装いだ。そこへ腕時計と皮のブレスレット、ピアスをすべて左にだけ付けた。小さな鏡の前でヘアワックスを髪にもみ込み、スプレーで固め、最後にたっぷりと香水を振りかけた。ボクという仮装の完成だ。誰にも負ける気がしなかったよ。ただし、どこのステージで何と闘っているのかは、皆目見当がつかない。

大声で返事するだけの朝礼を終え、セクションごとにオープン準備をしていた。悩ましいのは、これだけ辟易しながらも、ちっともこの環境が嫌いでないことだ。ペシミスティックに嘆くよりも迅速に、フロアに響く一発目のバスが、鼓動を突き上げ足を軽くさせるんだ。ご託を並べるのはやめるよ、そういう人種なんだ。長い夜がペテン師のトランプによって消し去られるのを、好んでしまう習性にあるんだ。

そんな毎日によってボクは、思考を容易に溶けさせる技能を獲得していた。頭

にトラを飼い、ぐるぐる周回させてはバターにしたよ。それは強力な麻酔みたいに感覚ごと麻痺させてくれたんだ。じりじりした頭痛だって忘れさせてくれたよ。それまでに投与した文学や音楽や、テレビゲーム、反抗に淫猥は、パッケージの違うアスピリンみたいで、時間とともに効力が弱まってしまったけれど、無感覚な日常は持続的に作用したんだ。

「へい、ピエロ。今宵も生き血を吸いつくそうぜ」

バーカウンターでコンビを組む、ブルーの液体を差し出してくれた例の彼が、ドラキュラに扮し、コップへ氷を入れながら言った。ボクは研修期間を終え、バー担当として配属されていた。ナイトクラブにはＤＪを頂点としたヒエラルキーが存在し、その最下層にスタッフがいる。そしてそのスタッフ内にもまた、別のピラミッドが存在し、ボクはその下から二番目のレイヤに属していた。氷や酒瓶のストックを補充していると、彼は瓶を回しながら真紅の液体を二つ作り、ひとつをボクにくれた。防犯カメラの死角に隠れ二人で景気づけの乾杯を

したんだ。狂騒に集う哀れな生贄たちへ捧げて。

いつもはまばらなオープン直後のフロアも、この日ばかりは違っていたよ。メイドに狼男、バニーガールやフランケンたちが列をなし、フロアを埋め尽くしていった。そのおかげでドリンクは、予想を上回る勢いで売れていた。

「ビールケースが足りなさそうだから運んでくるよ。うん、五分だけ任せた」

ドラキュラ伯爵はマントを翻し、バーカウンターにボクを置き去りにしていった。仮装を隠れ蓑に女性へ迫る学生や、女装姿で浮き世を忘れる中年男性、仲間を探しては握手を交わしカメラを向ける常連客などに取り囲まれたアイランドバーで、巨大な孤独を感じたよ。無人島に打ち上げられたオットセイの気分だったね。くわぁくわぁ泣きたくなったくらいに。ただ虚構の一部であったから、浸りはしないし痛みもなかったんだ。恋心に似たざわめきが、ちくちくとしたけれど、精神なのか内蔵のトラブルなのかわからず、診断も棚上げしたま

まで、欲望を千切ったドリンクチケットがこちらに放られるから、とびっきりの作り笑いで手を広げ液体を返していた。仮装した者同士の連帯意識からの疎外ならば、望むところだね。

一人きりで接客を続けていた。約束など棺で眠らせてしまっただろうに違いないドラキュラ伯爵はご帰還なさらず、途切れることのない列にあくせく追われた。そんなボクに休息を与えてくれるつもりなのか、巨大なウイッグと巨大なつけまつげのドラッグクイーンと、褐色の筋肉に皮のベストと短パンだけを身に付けた男性ペアが動かず立ち止まっていた。

「あんた好みだわ。ねえ、なんの仮装しるのかしら。教えてちょうだい」という問いかけに汗を払い答えず、三杯目のウォッカとイエガーのショットを渡してやった。掛け声とともに瞬時に飲み干していたが、それでも彼らはカウンターの前を離れなかったため、列が停滞していた。爆音をかきわけ声をかけるのが煩わしかったから、彼らを無視し次に並ぶ客のオーダーを取ろうとしたんだ。

するとドラッグクイーンのウイッグの茂みから、シャツのボタンをふたつ外した長身の男が、にょっきと顔を出した。仮装をしていない仲間がいた喜びで、伏し目がちとなっていた視線を上げると、「やあ」なんてさっき聞いたばかりの声がした。

「どうしたんだい。今夜はずいぶんと、つれない顔をしているね。僕は久しぶりの再会を祝いたいと願っているんだ。君にこうして出会えたことを嬉しく思っているんだよ。すごく。すごくだよ。それにしても大きな音が鳴っているね」騒々しさで上手く聞き取れないふりをすると、一言一句たがわぬ台詞を、抑揚や表情もそのままにボリュームを倍にして繰り返してきた。さすがハリウッド俳優だね、しっかりと監督の要求に応えてくれる。騒々しさに酔いも相まって、笑顔を浮かべてしまいそうになるのを止めた。

「やあ、ニコラス。職場へいきなり尋ねてくるなんていうのはルール違反じゃ

ないのかな。ルールブックなんかがあればだけれどね。朝方の帰り道に憩いを求めて立ち寄ったツタヤで待ち伏せする方が、いい画になると思わないかい。ボクがさんざん悩んだ挙句、『ナショナルトレジャー』に手を触れた瞬間だよ、そこで棚の影から顔を覗かせて、やあ、なんて登場するんだ。それならびっくりして、ＤＶＤをいくつか倒すなんてことをしてあげてもいい。ここは雑音を拾いすぎてしまうんじゃないかな」

アルコールと活気にのせられ冗舌になってしまった。ドラッグクイーンがライムを齧りながら上目づかいを寄こし立ち去っていった。

「なるほど、すごくよくわかるよ。ここは君にとって個人的な空間だからね。嫌な気になんてさせたくはないんだ。これっぽっちもね。ここの熱気だって、少しも下げたくないよ。正確な温度を維持することは、繊細な卵黄の火入れには必要不可欠だからね。ただ今夜この場所で、君に会いに来たのは、僕の意思ではないんだ。誰かが握るコントローラで、Ｂボタンを押しながら十字キーを

右に倒したならば右にダッシュをするし、Aボタンを押したならば飛ばなくちゃならないんだ。わかるだろ、僕の言っている意味が。あからさまなものだけでなく、自分で選んだつもりでいるものも含め、あらゆる行動はコントローラで操作されているんだ。そして場合によっては、コントローラを握っている人間もまた別の誰かによって、コントローラを握るように十字キーを入力されていたりするんだ。逆マトリョーシカだね。どんどんと〈ウエ〉に近づくんだ」

「君の言っている言葉がすべてだとするのであれば、ボクが例えばここで君に、頭から一リットルのミルクをぶっかけたとしても、後ろでコントローラを握る誰かを憎んでくれ。自由意思などないんだろ。こうして悪態をついてしまうのもボクのせいじゃないんだ。そして列を停滞させドリンクの売り上げを減少させているのや、次に並ぶティンカーベルを不機嫌にさせているのも、もちろん君のせいじゃない。安心して居座ってくれ。運命論より出来が悪いけれどね。ハロウィンが招いた怪奇現象ってことにしておいてあげるよ」

話題にされたことに反応したティンカーベルが、ボクと話し込むニコラスケイジを覗き見て、「えっ、超モーガンフリーマンじゃん。違うの。え、わかんないし」とピンク色の悪魔のしっぽをぶらさげた友人と笑った。ニコラスケイジが自分だけに可視できる妖精ではないと安堵しつつ、途方もない間違いは放置しておいたよ。履き違えられ生じた解釈が、誰かへ真実のように伝播されることは珍しくないし、別にそれを是正する義理だってない。全てはコントローラの持ち主の手の中に、なんてのたまう輩にはね。

「で、何にするの。注文は」

お目当てのナースをとり逃す前に、どうにかドリンクを差し入れたいと画策する白塗りの忍者が割り込んで来るのを、手の動作だけで注意し、ニコラスケイジに尋ねた。それでも忍者は引き下がらず、不器量にせがみ酒を要求してくるため、視線をニコラスケイジに残したまま、冷凍庫から金色のテキーラを取り出し2オンスのカップへ注ぎ、ドリンクチケットをむしり取った。

「僕はこの場所に飲みに来たわけでも、踊りに来たわけでもないんだ。とても残念なことにね。わかるだろ。僕だって叶うのであれば君と酒を酌み交わし、ウサギたちの丸いしっぽを追いかけ、汗でシャツを湿らせたいんだ。でも、それはまだ出来ないんだよ。君に伝えるべきことを伝え、君が立派なルイージになるまではね。足掻いたって何も変わらないだ。君はエネルギーを使う方角を誤ってしまっているんだ。わかるだろ。残酷かもしれないけれど、君はまな板のコイになるべきなんだよ。どうして捕まったのだろう、あのプランクトンにさえ目が眩まなければ、もっと速く泳げたならなんて考えたり、ぴちぴち跳ねて暴れたりしても遅いんだ。すでにオーダーは通っていて、君はまな板の上にいるんだ。しわのない割烹着に袖を通した職人の手には磨がれた包丁が握られ、鍋には甘辛く調理するための準備が整っている。それならばいっそ最高の煮つけになろうと、腹を括った方がいい。どうか、わかって欲しい」

「大丈夫。わかったよ。臭みもなく身のひきしまった、最高の煮つけになってみせるさ、なんて返答を期待しているのであれば、誘導が稚拙なうえに比喩が珍妙にして怪奇すぎるよ。オカルト趣味かと疑ってしまうね。コイになれとかルイージになれとか忙しくってかなわない。君は正論を述べる使者の気分に浸っているのかもしれないけれど、ボクにとっては迷惑な不法侵入者が職場まで押しかけて来たにすぎないんだ。いかれたストーカ野郎だよ。わかるだろ」と言ってからニコラスケイジ的に肩をすくめ、手持ちぶさたを紛らわせるために、オーダーの通っていないカクテルを作りはじめた。

「そんな風にされると、とても辛いよ。とても。本当にさ。君に嫌われることなんて、望んでないんだ。それどころか、親密でありたいと願っているよ。さっきも言ったようにね。自分を呪いたくなるよ。わかって欲しいな。上手くいくに違いないんだ。僕たちならね。だから、どうか、大切な言葉を伝えるから、きちんと聞いて欲しいんだ」そう言って人差し指を立て、ボクの注意を集めた。

「まず前回、君がルイージになることを、報告に行ったのを覚えているだろ。僕たちの出会いだよ。あの日から〈ウエ〉はずっと監視していたんだ。君のことをね。本当にずっとだよ。真剣に、裁断なくね。そして単刀直入に言って、ここまでの君に、〈ウエ〉は失望しているんだ。ルイージとしての君にね。わかるだろ。彼ら連中をね、がっかりさせて君が得することなんて、ひとつもないんだよ。損をすることには、いとまがないって言うのに。非常にまずい状況にあることをわかって欲しい。これは報告ではなく警告だよ。もうこれからは無駄なことは放棄しなければならないんだ。だけど難しく考える必要はない。ふりをすればいいんだ。潔癖症のふりをしていれば細菌を拭いたくなるし、気が触れたふりをすればまともじゃいられなくなる。ルイージのふりをするだけのことだよ。ふりをするだけならお手のものだろ。生卵のキャッチボールがはじまってしまったんだ。こうなってしまったら、どちらかが卵を割るまで終わらない。装置が機能するまでね。今回は君が受け入れる番なんだ。使者として、

友として、そして親密に想うものとして、心からのお願いだ。無駄な足掻きはよしてくれ」

「なるほど。ボクは牢獄に囚われたってことで解釈は間違っていないのかな。監視下で従順さと規律を押しつけられているんだからね。模範囚になれって強要されているみたいで、実に不快さ。それにね」ボクはシェイカーからプラカップにカクテルを注ぎ、口に含んで呼吸を整えた。「それにね、無駄なことこそ意味があるんだよ。知っているかい。たぶんドイツの誰かが言っているさ。もしまだだったとしても、明日には居酒屋で誰かが言うだろう。そしてこれ以上、ドリンクを求める仮装行列を止めるのは、ボクにとっての〈ウエ〉が許してくれないんだ。クッパ様があそこから鋭く見張っているんだよ」そう言って監視カメラの設置された個所を指差した。「でもね、君には少しも怒ってはいないよ。お菓子を用意していなかったボクのせいで、君にいたずらをさせてしまったのだからね。申しわけなく思うよ。だからこれを持ってお引き取り願い

たい。素晴らしいハロウィンの思い出にね。スノーボールという卵のリキュールを使ったカクテルだ。卵が大好きな君に奉ずるよ。どうかキャッチボールとやらも終わりにしておくれ」

先ほど僕が口をつけたカップを右手で差し出し、左手で列を進めるようにティンカーベルに合図を送った。それと同時に長いトイレ休憩を終えたドラキュラ伯爵が、髪を彫刻のように固めてご帰還なされた。ニコラスケイジは遠くを見透かす澄んだ目を向け、小さく首を振っていた。そのまま手渡されたカップを溢さないよう慎重に握り、カラフルな群衆へと消えていったよ。ブラックライトが白いシャツを浮揚させていた。

「あれ、なに。友達なの」

というドラキュラ伯爵からの問いかけには、聞こえないふりをした。

積み上がったテトリスのブロックを消すように、次から次へと落ちてくる注文をこなしていった。相手によって表情を使い分け、華美であろうと務めたよ。そんな連続こそが頭に飼うトラたちの、恰好の餌となることを知っているからね。彼らが元気に弧を描き走り回るほど、思考はとろとろと鈍化し、芳醇なバターになるんだ。影も形もないものとして形成されていくように。

ハロウィンのため導入されたレイザービームが、ダンスホールへ差していた。ミラーボールは回り続け、明滅するライトがシステマチックに異空へ誘っていた。短時間で失われることを前提とした輝きだ。人々はちりっと弾けるはかなさを刺激に喚いていた。大した代償も支払わずにね。これら無責任な騒乱の宴は、ノーフューチャーの体現に思えた。未来なんて、どこを探したってなかったからね。それは子供の頃からずっとだ。夢うつつの祭りが終わり、ゴミばかり残されていたんだ。消えてしまった幻想を追いかけ、競いあって揚げ足を取っていた。不都合はあとを絶たず、暗闇へと邁進するニュース映像ばかりを刷

り込まれた。物は溢れていても鬱積した。贅沢でわがままだと言われたよ。奔放と抑圧がアンバランスなまま大人になれば、「失われた世代」だなんて存在を抹殺される始末さ。

未来を知らないボクは、未来のないこの場所にやってきたんだ。正直に言えば、理由などないから、またしてもでっち上げたのだけれど。それでも幾度となく使っても風化しないから、暫定的に理由としての役割りは果たしていたよ。ここで働いてからどれくらい経つのか、わからなかった。時間軸など、もやもやの紫煙に隠れてしまっていたからね。今年があと何カ月と何日で、その間に得る収入と支出だって概算はできるだろう。だけど、どちらもしないんだ。獰猛なトラが許してはくれないからね。かぼちゃのお面を被ったオバケの後ろに並んでいる猫耳とティアラを付けたお姫様が、この十五分で三度もドリンクを買いにきているのだって、知らないふりをした。人混みに紛れさせてしまおうとしたんだ。話しかけるきっかけがなかったからね。他の誰かならばいとも容易

いというのに。さらにドラキュラ伯爵ばかりにオーダーし、ボクへは去り際に会釈とも、目礼とも、歩くために頭が下がったともとれる、微妙なニュアンスだけを寄こしていた。そして目前に迫った、この機会。足元の冷蔵庫を開け、カットレモンを補充するふりをし、冷やしていたブラックサンダーをかじってジャンプした。

「ねえ、すごいペースで飲んでるけど大丈夫かな。水を入れてあげようか」とカチューシャの猫耳に向け、当たり障りのなさにのみ配慮して言った。

「ぜんぜん、大丈夫です。だってそのためにお昼から食事を抜いてるんですよ。わかりますか」

真意が掴めないから、にこやかにかぶりを振った。すると彼女が、バーカウンターに上体をぐっと寄せてきた。三角の耳のピアスも近づいた。

「胃の中を空っぽにして、Xレイティッドだけでいっぱいにしたいんです。もしも気分が悪くなってしまったって、ピンクの液体だけしか出てこないんですよ。かわいいと思いませんか」と彼女は緊張を隠さず細く高く言った。ボクは好意的な印象を与えようと目論んだがために、過剰なリアクションをしてしまった。長閑にして不自然なコミュニケーションだ。

「ごめんなさい。あらかじめ準備していた冗談なんです。つまんないですよね。本当にセンスがないんです、ごめんなさい。ひょっとして私に気が付いてもらっていたりしませんか」そう言って寂しそうに視線を下げ、揃えたつま先を見つめて踵を浮かせていた。いつものようにね。

「ごめん、三分で戻るよ」

接客中のドラキュラ伯爵の後頭部へ投げかけると、返事を聞かずにバーカウンターをくぐり出た。「あとでたっぷりと生き血をご用意しますから、剥いた牙

をお納めください」と背中へ呟いた。両手でカップを握る彼女の腕をつかみ、螺旋階段を上っていった。

「まさかここで会えるとは思わなかったよ。もちろん、ずっと気がついていたけれど、どうにもできなかったんだ。情けないことにね。コーラをオーダーする側だったなら慣れているんだけど。ボクには確信と勇気が足りなかったんだ。バーカウンターに何度も来てくれて、ありがとう」

フロアを見下ろす吹き抜けの二階ラウンジで並んで立っていた。ミニスカートの婦人警官と、ゾンビにはさまれた狭いスペースだった。そのおかげで、ボクの肩に彼女の猫耳が触れていた。やけに素直な態度なのは、ポケットに入った食べかけのブラックサンダーが溶けていたせいだろうね。因果関係なんて無粋なものは、ないに決まっている。

「こちらこそ、ありがとうございます。こういうお店に初めて来たので、どう

していいのか、全然わからなかったんです。だから働いておられる姿を発見して、ほっとしてしまいました。お昼にいつもの大きな方を誘っているのを聞いたんです。それで、私も行ってみたいなって思って、一人で来ちゃいました。とにかく、とにかく、よかったです」

前髪が汗に濡れ、白い頬は紅潮していた。ボクは赤いティシャツで健康的な食べ物とゲームに囲まれているであろう彼の方角へ、健闘を讃える拍手をした。

ブースでは今夜のメインＤＪがヘッドフォンを片耳にあて、リズムを拾い曲をつなぐ準備をしていた。すでに入場制限がかかり、フロアは仮装した集団によってひしめき合っていた。ボクたちは特に会話をするでもなく、視線を宙で遊ばせ寄り添っていた。爆音のなかでの沈黙は、雄弁でさえあったため、親密に感じたよ。ニコラスケイジがまだどこかにいるのかもしれない、なんて考える余裕が生まれるくらいにね。ウォーリーのボーダーシャツでも着てくれていたならば、探す楽しみがさらに増しただろう。彼だったら実写化も悪くないはず

だよ。彼女が隣にいるというのに、関係のないことばかりを考えていたんだ。ボクらしく、どこにも含まれず、どこでも傍観者だった。

フロアから歓声があがり千六百歳の誕生日を祝うロウソクみたいに、人々が両手を挙げた。ケミカルブラザーズの『Star Guitar』がスピーカから放たれ、人々は脳を揺らし体の中心にある鼓膜を震えさせていた。繊細な面影がループし、それが圧倒するリフに確立され、高揚を増幅させていった。女性ボーカルの歌声は、記号として拡散された。まるで啓示のように。ビートが重なるほどに多幸感が量産され、閃耀が表皮を包んだ。ボクだってね。大抵のことがうまくいきそうな、無敵な状態さ。この時間を活用し、彼女へ気が利いた言葉を送りたかった。だから頭に飼うトラたちを制止させるため、「どうどう」と声をかけていたけれど、ウシやウマではあるまいし、興奮するばかりであった。

汗とアルコールと二酸化炭素が膜を張り、湿気を含んだ重い気体が人工的な靄

となり店内に充満していた。『Star Guitar』はビートを着実に進め、ついには次曲の面影を点滅させ透けさせた。その拍子に、特殊効果のスモークが勢いよく焚かれた。覆われた皮膜を突き破るように、フロアから一直線でボクたちをめがけ噴射された。視界は瞬時にして略奪された。ホワイトアウト。

そして彼女の姿はどこにもなくなってしまったよ。どこにもね。ボクの黒いシャツの胸ポケットに、日付と住所の書いたメモだけを残していなくなったんだ。

吹き抜けから覗くフロアの地面が土へと変わり、ステップを踏むたびに土埃が舞い、早回しの雨のシーンのように水分を含み、みるみるぬかるみとなり、それに誰も気づかぬままダンスは激しさを増し、ずぶずぶ地中へ飲み込まれ、プラスチックな肉体は弾けながらあたり一面に、ピンクの液体をまき散らせる。ボクはそれらを箸で立体的にバランス良く盛り付け、平らげた。少しの空腹も感じないままに詰め込んだ。白に黒を混ぜても、黒に白を混ぜても、出来上が

るのはグレーな世界だった。緑には抗いようもない。そんな気分だった。

8 - 2

空気の異様さに目を開かされた。部屋中に、おびただしい靄がかかっていた。夢から覚めた夢みたいにね。過去で焚かれたスモークが、留まってあるように感じられたんだ。現在か過去なのか判断はできなかったけれど、靄の正体が湯気によるものだとはわかったよ。それはあらゆる場所で、水の放出されている音がしていたからね。ソファからもっとも近くで音を鳴らすキッチンを確かめると、赤い火が灯っていた。蓋の開いたストーブ鍋が、ぐつぐつ煮え湯を沸かせていたんだ。火を消し止めると、次はシンクへ打ちつけている水道の蛇口を止めた。金属を伝う熱から、最高温度に設定されているとわかった。それでもまだ終わりではない。樹海を進むように濃い靄をかき分け、バスルームや洗面所と、順々に蛇口を閉めていった。ご丁寧にティファールも上限ラインすれす

れで、沸騰させてあった。

サービスの一貫なのか、おとぎ話に愛想をつかせたのか、プレゼントが準備されたサプライズパーティなのかわからないけれど、辟易するのも面倒だから、薄目で無表情にこなしていった。飛び道具が行き交う忙しさをかいくぐり、一箇所ずつ頭のボルトを締めるように回し、緩みを正していったんだ。湯気の発信源をすべて排除したって、リビングの照明は点けなかったよ。ほの暗い部屋で、ポスタのウォーホルが汗をかいているのは悪くなかったからね。

ボクの体型にくぼんだソファへ座るのが嫌だった。だから消去法的な思いつきで、コーヒーを淹れることにしたんだ。昼に買ってきたコーヒー豆を力づくで開封すると、焙煎されたばかりの新鮮な香りが膨らんだ。この豆を選んでいる頃に予定していた、コーヒーを淹れているボク、はこんな目にあっているはずではなかったけれどね。どうせだったらこのやり場のない感情を、コーヒー豆

にもお裾分けしてやろうと、保存用のビニール袋に移し、しゃもじでたたき割ってみた。甲高く音が響き手が痺れただけで、ほとんど割ることはできなかった。それからすぐにコーヒーミルへ移し荒く挽いた。粉になったコーヒー豆をフレンチプレスへ三杯分放り込み、ティファールからお湯を注ぐと、アフリカゾウが箔押しされたマグカップを出した。

透明な液体に黒いシミが滲むのを待ちながら、こちら側からいなくなってしまったのであろう、過去買収屋の彼女のことを考えていたんだ。ワンルームで、これだけあくせくと動き回り遭遇しないのだから、いなくなったと考えるのが妥当だろう。それは一時的な不在ではないよ。パンとキャラメルマキアートだってなくなっていたのだからね。それに側にいた女の子がいなくなる現場を、追体験したばかりなのだから、その雰囲気については生々しくわかっているんだ。そんなことよりも、とにかく、まずは室内の除湿が最優先であると、リビングのテーブルからエアコンのリモコンを取りあげ、いなくなったのであれば

靴はどうしたのだろうかと気になり玄関まで行き、やっぱりどこにも見当たらなくて、代わりに乱雑に脱ぎ捨ててあったボクの靴がきちんと整頓されてあり、いないけれど確かにいたのだという痕跡に触れ、そういえば彼女が履いていたヒールがどんなだったかちっとも思い出せないなと、思考を煽るために頭をこんこんと人差し指で軽く叩こうとして、なぜ自分がリモコンを握っているのか意味がわからず、靴に挿した。まるで非生産的な靴ベラみたいだったよ。この程度のアクシデントでは微塵も動揺せず、冷静さを欠いていないのだという気丈さは、一連の挙動から虚勢であると知らされた。ボクはやっぱり、ひどく落ち込んでいたんだ。短い時間だったけれど、彼女を特別に感じていたからね。

フローリングに溜まった水滴で、足の裏を濡らしながらキッチンへと戻り、アフリカゾウのマグカップを、マルタンマルジェラのカーディガンがぶら下がるハンガーフックに掛けてから窓を開けた。夜の空気を体と部屋へ取り込んだ。遠くのビル群と近くの街灯の明かりで、着ているティシャツのデザインを確認

した。数年前の行ってもいないロックフェスのものだった。このまま裸足でベランダに出て、夜の街へ言葉にならない感情を吐露し、カラスが食い散らかしてくれたなら、どんなに楽だろうかと思った。

自分の部屋でひとりぼっちなのに、どこにも居場所がなかったよ。シャワーを浴びたくはないし、ドライヤーで髪を乾かしたり、着替えや日課のストレッチを思うと、ローストビーフを生肉から作るほうがましだった。ソファへ座るのは遠近両方の痛みのうち、どちらの傷口にも沁みるから遠慮したんだ。汚れた体のままでベッドに寝転ぶのはこんな時でも許せなかったし、音楽を聴きたくはないし、テレビだってつけたくもない。賑やかしは苛立ちにしかならないだろうからね。骨董市で買ったアンティークの時計を座視したとしても、ただ黙々と動く針を追う羽目になるはずだ。今が何時かだなんて、どうでもいい。はちきれそうなほど満腹で動けないなら、ただじっと消化されるのを待つほかに術はないんだ。

行き場もなく煩悶し、ベランダに出るでもなく、網戸の前でしゃがんだ。ボクの知らないところで刻一刻と事態が悪化するように、コーヒーがずいぶんな濃さで抽出されるまで動かないでいたよ。しかるべきタイミングを逃せば、半熟卵が作れない理屈だね。ただボクにはその渋すぎるコーヒーを飲まずに、シンクへ流すという自由があるんだ。それを自由と呼ぶかは別にしてね。ペプシコーラやなんかが飲みたかった。ずっとやめているメンソールタバコまで吸いたくなった。解決はしないけれど、喉に清涼感と刺激を与え血管を収縮させれば、一分間は背徳感めいたものに包まれるはずだよ。どんな色でもかまわないから加え足し、支配されそうな感情を濁してしまいたかったんだ。油断をすれば、彼女たちのどちらかが現れてしまうからね。

視界の端に映るマンションで、いくつかの照明器具が消灯し、またいくつかが点灯した。スローモーションで遥か先の宇宙へモールス信号を送っているのか、

途方もない長考を繰り返すボードゲームなのか、就寝や外出による生活に起因した明滅なのかは知らないけれど、焦点をぼやけさせたり滲ませたりと、とにかく眺め続けた。とても長い時間を過ごしたよ。膝と腰が痛みを超えて感覚がなくなり、後ろに転げるまでね。見慣れているはずの天井だ。視界が変化した。それだけのことだったよ。ひょっとするとボクの手の届かないところで、誰かがそのせいでくしゃみをしたり、ノコノコとして生きることを強要されているのかもしれないけれど。知ったことじゃない。体を起こすなんて発想はなく、じっとりと湿気を抱えた床で脱力し寝転がっていた。このまま眠ってしまえたならば、悪い夢にはうなされるだろうけれど楽だろうね。待っているのは目覚めなのだから。眠気を呼び込もうと、起床からここに至るまでの一日を、俯瞰で再生しなぞっていった。この方法は幼少期から常用する、ボクにとっての睡眠導入剤だ。歯磨き粉のキャップを開け、チューブから絞りだされる描写まで丁寧にね。彼女たちとのことはしつこいくらいに巻き戻したけれど、顔や声はどこまでもあやふやだったよ。ボクは観念し上体だけを起こした。

「勝手にやってきて勝手にいなくなるなんてあんまりじゃないか」と強く思ったから声にだしてみた。暴力的でひどい仕打ちであると。ずいぶん久しぶりに声帯を揺らしたよ。すると、とても喉が渇いているのがわかったんだ。それにより淹れっぱなしのコーヒーを思い出した。コーヒーを救えるのは自分しかいないのだと、白線の上だけを歩いて家まで帰ったなら世界はきっと平和になるのだと信じる類の、一人遊びの延長で、キッチンへ向かう決意を固めたんだ。痺れる足でテーブルに手をかけ立ち上がり、不規則なステップを踏んでリビングを縦断しシンクを掴むと、コーヒーには目もくれず冷蔵庫からペプシコーラを出した。

オレンジ色の照明に晒された異端な物体によって、プルタグにかけた手は止められてしまった。どんなに狭くとも、囲いの中に含まれたのならば秩序や統制がある。冷蔵庫だって例外じゃない。ケチャップやドレッシング、ビールはそ

れぞれ住み分けがなされているんだ。ソファに積み上げられたティシャツの山だって等しくね。その序列を乱す小瓶が置いてあった。サメのイラストが描かれたシールの貼ってある、キャビアの瓶詰だ。もちろん買ってはいないし、貰ってもいないよ。この部屋に引っ越してから人を招いたことなんて、一度としてないのだから。勝手に侵入していた人物は二名いたけれどね。そのまま何ごともなかった様子で冷蔵庫を閉じた。明かりを浴びたせいで、暗さばかりが鋭く強調されてしまったよ。

「わかった。わかった」

理解せずに深くうなずき、ペプシコーラを崇高な卵でも祀るようにコンロに挿した。そして冷蔵庫を再び開き、消費期限を超過したホワイトアスパラの缶詰を電子レンジに載せてから、キャビアの瓶に触れた。

それは単にキャビアでしかなかった。きつく閉じられた蓋を外せば、チョウザ

メの卵が艶々と敷き詰めてあるだけのね。魚卵まみれになった婚約指輪が仕込んであるなんて演出もなさそうだ。では、なぜ、冷蔵庫へキャビアを置いていく必要があったのだろう。過去を語った顧客へのサービスとして、疲れた体を労わりプレゼントするとは考え難い。それではあまりに費用対効果が低すぎるからね。おそらく彼女が、個人的にボクへと贈ったものなのだろう。冷蔵庫の卵ポケットに収められた、茶色の紙と一緒にね。スターバックスの紙袋の切れ端だった。十一桁の数字が書いてあるメモ。既知感が満載の仕掛けによって、差出人はボクの過去を話した相手か、過去を共有した相手に絞られたよ。

暗がりは解釈を誇大させるため、冷蔵庫を開け放ったまま部屋を徘徊した。ここに書かれてある番号に、電話をかけるべきなのかを迷うためにね。頭で組み立てた会話は、袋小路を目低地に設定したカーナビのように、行き止まりへばかり向かって進んでいった。おそらくボクは、彼女たちと話すべき言語を持たないんだ。それに頭のトラたちも、ところどころ毛は抜け落ち年老いてはいた

けれど、しなやかに健在だった。次なる行動の外堀は埋められるようになっても、内側はどんどん空洞化していたんだ。穴ばかり広がるベーグルみたいにね。立ち往生する思考の抜け道を探そうと、ぺたぺた足を鳴らし移動した。焦燥ばかりが募るためバスルームに入り、暗がりの浴槽の淵に腰をかけた。ボクからの電話を待っているのだろう彼女たちのことを、しっかりと考えなくてはならない。こめかみに握りこぶしを押し付け、集中しようとしたんだ。するとボクには、考えなければならないことが、列をなしていると知らされてしまった。どれから手をつけていいのかわからないほどの長い、長い列だ。すぐに解決すべきだった可及的な問題たちも、向き合わず放っている間に、群衆へ紛れてしまっていたよ。立ち竦むしかなかった。そういうことにした。大義名分や理由にしようとしたんだ。おそらく電話だってしない。やろうとした事実までで、それだけで満足してしまうからね。曖昧ながらも完結したようなものじゃないかって。

喉の渇きが限界だったから、思考ごっこに区切りをつけ、葛藤ごと排水溝へ流した。ボクにはコーヒーの処遇を判断するという、大役が課せられているからね。こんなところで、電話についてなど悩ませている場合ではないんだ。義務感を意図的に誤って引き受けたよ。バスマットに足をかけると、登録されていない見覚えのある番号からの着信により、アイフォンが震えた。心当たりはひとつしかない。キャビアの番号だ。画面に表示された「応答」をタップし、洗濯機にもたれて足を折った。段ボールから冷えていないペプシコーラを拾うと、すでに彼女は何かを言っていた。

「……もしもし、あの……名前、まだ言ってなかったですよね。私です。今日のお昼に過去を買い取りに行きました。わかりますか」

さっきまでこの部屋にあった声だった。胸がぐっと締め付けられながらも解されてしまったよ。

「こんばんは。キャビアの君だね。やっと霧が晴れそうだ」

聞きたいことばかりなのに、どうでもいいことだけを言ってしまいそうな予感を孕んでいた。彼女はボクの言葉に苦笑をした様子だったけれど、うまく聞き取れていなさそうだった。

「どうしても戻らないといけなかったんです。急を要していたのです、とても。無理やりに連れ出されてしまったと思ってください。多くがまだ途中だったから、すっごく気がかりでした。どんな理由であっても、お客様が話している間に部屋を出るなんて、プロとして失格ですよね、ごめんなさい。本当に時間がなかったので、番号をメモに書いてテーブルへ置いていったんです。でも、きっとかかってこないって思ってました。だから伝言だけでもお願いしようと、依頼書に記入してあったデータから、あの長身のオジサンに電話したんです。そしたら、あなたの声がして。びっくりしています。そして嬉しくなっています」

「うん、うん、うん。そうだったんだね。ちっともかまわないよ。うん。だいたいのところは理解したよ。いや、してしまった、と言った方が正しいかな。ボクはね、君の言葉で踊りだしそうなんだ。雨のなかで嬉々として、傘を振り回しラブソングだって歌えそうだね。君のためなら鼻を赤く塗った、ピエロになったっていいよ」とおどけてみせたけれど、こちらからの声は途切れながら届いているらしかった。ほとんど独り言みたいに彼女は言った。

「もしも時間が許すのであれば、私の話を聞いてもらえませんか。長くなってしまうかもしれません。できるだけ手短に早口で話しますから。どうしても、あなたには聞いて欲しいんです」

ボクの知っている彼女の話す速度より、すでに早口になっていた。ボクはそれに、言葉を区切りゆっくりと返した。

「悲しいことに、今夜は、予定がなく、約束や仕事もないんだ。あのオジサン

も、コーヒーを買いに行ったきりで、戻って来なかったよ。ボクの知る限りではね。まあ、聞くという行為には申し分のない、最良の状況なんだ」と言ってからボクは、会話が長くなるのに備え、冷蔵庫を閉じてから、暗がりのソファへ投げやりに座った。

「ごめんなさい。落ち着いて話すことはできないんです。一息で話してしまわないと、うまく伝えられなくなってしまいそうで。わがままばかり言ってますよね。ただどうか、相槌などせずに、じっと聞いて欲しいんです。茹でたての卵を、冷水にかけるくらい重要なことなんです。上手に殻をむけず、白身がでこぼこの黄身が飛び出した代物によって、ゆで卵を認識して欲しくないのです。きちんと伝えたいんです。あなたが私にしてくれたように、私もあなたに話したいんです」

ここ数年の間に、卵を使った比喩が氾濫しているみたいだった。立派な雛鳥が、せっせと休むことなく卵を産んでいたのだろうね。

「わかった。やってみるよ。ボクは連れ戻される心配もなければ、報告や買い取りをする義務だってないからね。ついでに嘘をつく必要もないんだ。お地蔵さんに話しかけるように、どうぞごゆっくり」と言うと同時に、背中がぞわぞわとしたんだ。電話を受けるまではなかった悪寒が、あちこちに駆けていた。原因は知っているよ。だからボクはトラたちに、必死で餌を撒いていたんだ。彼女が深呼吸をしているのが、受話器から聞こえてきた。切り出すタイミングを計っているらしい。ボクはもう、これから語られるだろう内容を、肉体的に受け取っていた。

「……誘われるまま美容師を辞めて、ケンブリッジへ行ったんです。ホーキンズ博士のいる、イギリスのケンブリッジです。ブラックホールの……自分はずっと平坦な人生を……に興味を持つことすらなく……。私の前に岐路を示してくれました。だから二人で暮らしはじめました。まずは彼という人物について

説明しますね……きちんとされていないことを憎むんです。きちんとしていることが、最大の美徳なんです。買い物をしたお釣りで、しわくちゃの札を受けっとって、次にうっかりと使ってしまえば、自分のお金じゃないんだ、なんて弁解をするような。……わかりにくいかもしれませんが……なんです。とにかく、黒いもの以外は一切食べない人と、ケンブリッジのレジデンスで同棲生活をしたんです。ごはんやパンはもちろん食べないし、ヴィネガーをたっぷりかけたフィッシュ&チップスも食べません。これは私も食べないですね。ごめんなさい。口にするのはチョコレートやコーヒーやコーラです。彼のなかでは厳密な……ませんが、琥珀色した黒ビールは飲み……偏食になっ……もありませんでした。それでも宗教的な戒律を守るように徹底していました。しかし私が食べるのを嫌がることはありません。慣れるまでに時間はかかりましたが、その点を除いてはごく一般的な留学生の恋人同士でした。休日にはバスでロンドンへ行きフットボールやミュージカルを観たり……貴重でした。しかしそれもすべてチョウザメに喰われてしまったんです。チョウザメです。ボリボリと……

で噛み砕いてしまったんです。少し酔ってしまった私が、眠っている彼の口に、ハリボーの黄色い熊のグミを乗せたせいだと思っています。もしくは、台湾人の留学生と一夜限りだけですが……浮かれていたんです。そこから、その夜から彼は変わってしまいました。図書館でチョウザメとキャビアに関する資料を閉館まで……チョウザメについて得た知識を自分の中へ取り込む……。わかるかな、キャビアとして卵を食することが乱獲を招き、絶滅に向かわせるんだ。それでも食べたいという人間の業によって、皮肉にも希少価値が上がる。種を絶やすほどにむさぼりながら、さらに魚卵を食したいがために種の繁栄を願うなんて、矛盾を内包した行為……ベッドで彼はチョウザメに受精させるため、私を抱いていたんです」

ボクは通話を切断せずに、アイフォンを耳から遠ざけていた。フローリングに投げると、頭の後ろで腕を組んでソファに寝転がった。漏れ聞こえてこないように、耳殻をたたんでクッションへ押しあてた。それでも残響が塞ぎきれなさ

そうだったから、テレビをつけることにした。液晶画面に、定点カメラで、陸橋を映す無声の画像が現れた。ちっとも役に立たないな。それでもチャンネルを切り替えずに、非力なテレビを放置したよ。脱いだ形で固まってあるズボンのポケットから、イヤフォンの挿さったアイポッドを取り出し、シャッフル再生した。どの曲であろうと関係ないんだ。欲しているのはよく喋る耳栓なのだから。

選ばれたのは、ライブラリに読み込ませた記憶のない民族音楽だった。驚くことじゃない。数千曲もあれば知らない曲だって紛れ込むよ。一分間に百二十拍で刻まれる軽快なテンポの音楽が鳴っていた。名前の知らない、フォルムも想像できない楽器だらけで、グルーブをだしていたんだ。それに誘われたボクは、大げさに肩を揺らし、リビングの明かりを点けた。そのままキッチンへ向かい、キャビアの瓶詰めをアフリカゾウのマグカップへ投入した。そこへ暗黒に抽出されたコーヒーを注ぎ、仕上げに牛乳を垂らした。奇天烈なタピオカドリンク

の完成だ。とにかく、最低なキャビアの食べ方がしたかっただけなんだ。ここ十年で誰もやったことのないようなやり方でね。目論見の半分は成功したけれど、とても口をつける気にはならなかったよ。

ボクはどうやら不感のまま空転している。感情に論理が追いつかないんだ。どちらが先を行っているのかだってわからない有り様だよ。これらはいつの日かのマクドナルドで、フィレオフィッシュをかぶりつく刹那なんかに遅れてやってきて、飲み込めなくなるほど胸を痛めるのかもしれない。それはたぶん、ボクにはどうしようもないことなんだ。ボクの住所を記した小包が郵便局に持ち込まれ、受付が済まされたことは知っていたけれど、いつどのようなものが届くのかわからないみたいにね。大抵は不意をついて、まとめてやってくるんだ。こんな夜にね。

民族音楽が最後のさざめきまで知らない楽器で締めると、聞き覚えのある音に

繋がった。ザストロークスの「I'll Try Anything Once」だ。ピアノのくぐもった優しい憂いの旋律に、セピア色のしゃがれた声が重なる。その弾かれる音のせいで、ボクは彼女たちに、会いたくてたまらなくなってしまったよ。スニーカを履き、夜の街へ飛びだし、彼女たちの家へと、理由も用意せずに向かいたくなったんだ。どこに住んでいるのかわからないし、会いたいと願う彼女が誰のことなのかもわからないけれど。それでもボクは、イヌも吠えないような静かな夜を行くんだ。あてもなく彷徨うんだ。財布や荷物を持たず、ポケットは空っぽにしてね。胸に去来する、変換不能なメランコリックでノスタルジックなもやもやを、ぶら提げながら。取り戻せないものばかりへ、幸せであれと祈りを捧げてね。

吐きそうなほど締めつけ去来する感情に耐えるため、ゴミ箱に座った。アルミが冷たく湿っていたよ。リビングではテレビが相変わらず定点を捉えていた。それはずいぶんと前に通ったことのある陸橋に似ていたんだ。深夜まで忘れて

しまっていた恋人の誕生日を埋め合わせるため、自転車にまたがり、電話で機嫌をとりながら走り抜けた陸橋だ。好きだった食べ物のひとつだって思い出せないけれど。彼女は元気にしているのだろうか。あの日のボクはまだ自転車を漕いでいるのだろうか。アイフォンはチョウザメについて語っているのだろうか。彼はケンブリッジでキャビアに埋もれ眠っているのだろうか。答えのない疑問ばかりを浮かべ、近づいては離れていったものに駄々をこねた。死んだ人や、生きているだろう人、今日までにすれ違った全ての人を特別に感じた。それらが引き剥がされ、ボクに留まっていない無情で打たれてね。

これを感傷と呼ぶには美しすぎる。アルコールが欲しくてたまらなくなったよ。気持ちの扱い方次第で、十年ぶりに涙を流すことだってできそうだ。それを許さないのは陶酔した自分への嫌悪感だね。だから無関係な器官を活動させ、紛らわせようとしたんだ。レンジに置いてあったショートブレッドを二本まとめてかじった。ちっとも食べたくなんてないさ。イヤフォンをつけていたから、

口内で鳴らされる音が頭蓋骨に響いてきた。それはチョウザメがボリボリと骨を噛み砕いているみたいだった。おそらくね。水分が失われていたせいで喉を通らず、無理やり飲み込もうとしてむせてしまった。おかげで生理的な涙を浮かべることになったよ。それにより曲解した美意識だって、損なわれずにすんだんだ。

ズボンにこぼれたショートブレッドのクズを、床に落とさないように注意して腰を浮かせ、ゴミ箱の蓋を開けてから払った。すると腕がイヤフォンのケーブルにかかり、無理やりに他者から引っこ抜かれた恰好で外れた。苛立ちが耳から全身へ入ってきたよ。だからボクはそのままリズムよく、勢い任せにアイフォンごとゴミ箱に叩きつけてやったんだ。押し寄せる波をカウントしたってきりがないから、溺れる覚悟で放棄したんだ。

ゴミ箱の蓋を閉じ、腰を据えると目をつむった。ここにいたくなかったからね。

中断された過去をなぞりに帰ることにしたんだ。土管には潜らない、地続きの場所へと。

そして唐突に、視点が奪われた。シンコペーション。

8 - 3

赤いカンペールの革靴を履き部屋を出た。スキニーパンツの左ポケットには紙切れが入っていた。エレベータホールで下降のボタンをタッチした。地上八階からの眺めは、隣の街の巨大なビルまでを結ぶ中間部の灯りが消えていたため、距離感を忘れるほど静けさが保たれていた。三棟並んだエレベータの、中央のランプが点き、ほどなくして扉が開いた。時刻は午前二時一分。教会あたりで、小さな花火があがった。動きを止め視線を送りはしたが、すぐに忙しくタップするアイフォンへと目を落とし、エレベータに乗り込んだ。行き先階ボタンを

押さず、エレベータの窓の反射を利用し、頭からつま先までをチェックしていた。髪の分け目を二度ばかり変更し、結局は元へと戻した。エレベータが勝手に下降をはじめた。どこかの階でボタンが押されたのだ。慌てて一階のボタンを押した。エレベータはどこに停止することもなく、一階のエントランスホールに着いた。待っている者はいなかった。大理石を踏み出し、目的を果たすため夜を歩きはじめた。

古い映画館と個人経営の小さな本屋が並ぶ路地を通り、石畳の敷かれた小路へ折れた。緩やかな起伏と段差が折り重なり、左右へ幾度も曲がりくねっていたため、五メートルより先の景色は確認できなかった。街灯はなく、黒さを遮るものは青い月だけだった。路地の入口には家屋が二棟と、カフェとバーがそれぞれ一軒ずつあった。すでに店は閉じており、人の匂いや温度はなかった。吐き出す白い息と、吹き抜ける冷たい風だけが動いていた。小動物や虫もいなかった。軽やかに歩を進める。背の低い草木や枯葉のない足元を、素早く交差さ

せた。ポケットをさぐり、アイフォンを開きながらぐんぐんと行った。

しばらくすると、見覚えのある景色にぶつかった。それは十五分前に通ったばかりの、路地の入口に酷似していた。歩みを止め、首を傾けながら、通過したはずのカフェとバーへ近づいていった。窓ガラス越しに店内を覗き込むと、どちらにもテーブルやグラス、酒瓶は置いていなかった。しかし店をたたみ放置され、埃をかぶっているでもなかった。きちんと無機質に空っぽだった。アイフォンでマップを開いたがＧＰＳは拾えず、現在地を示す青い点は、映画館から通りを隔てた薬局を指していた。道を戻るにも、他に折れる角はなかったため、先ほどよりはペースを落としながら、また歩いた。落ち着かなく出し入れを繰り返すアイフォンで、ブックマークを手当たり次第に開き、画面を凝視していた。目まぐるしく、開いたページの上からさらに新しいページを開いた。灯りを求めているのか、気を紛らわすためなのか、二度も同じ道を歩くことに恐怖しているのか、とめどなく繰り返していた。その合間に幾度かマップを開

いていたが、現在地は薬局から動かなかった。電池の残量が着実に減っていった。視線を動かし曲がり角を探していた。それでも同じ景色が強固に反復の姿勢を示していた。三度目にカフェとバーに出くわした際は、小走りで通り過ぎた。目的地に到達するための焦りなのか、置かれている状況に対する戸惑いなのか、恐怖心をシェアするためなのか、息を弾ませ電話をかけた。

「ごめん。迷ったかもしれないんだ。もう着いているのかな」

騒々しさだけを漏らす相手には、こちらの声が届いていないらしく、同じセリフを大きな声で、苦笑交じりに、細かく区切って、と三度言った。返事の代わりに返ってくるのは、割れた音楽らしきものと、人々の叫びらしきものだった。

「たぶんちょっと遅れるよ。でも必ず行くから。ねえ、そっちに着いたら一緒にピザを食べよう。君が黒い物しか食べられないのは、もちろん忘れていないよ。だから食べてくれなくてもかまわないんだ。ボクとピザが乗っかったテー

ブルを囲んでくれるだけでいい。そしてライムを刺したコロナビールで乾杯しよう。いや、君に合わせてギネスビールでもいいね。むしろそっちの方がしっくりくるかもしれない。ピザはシンプルに、水牛のチーズとトマトにバジルだけのやつがいいね。素材のふんだんな水分を飲み込むために、もっちりとした生地が支えているようなのが理想だよ。おそらく、そこにはないだろうね。いいんだ。生のマッシュルームをかじるのだって、悪くない気さえしている。とにかく、向かっているよ。なかなか手ごわい連中が大挙して押し寄せているんだけれど、やってみる。お腹を空かせて待っていて欲しいんだ」

相手に届いていないとわかりながら言っていた。声はやけに陽気そうだった。その話し声に反応し、暗闇の先に潜んでいた影が動いた。イタチかネズミくらいの大きさの物体だった。三度とも左折した石段へとつながる角を、曲がらずに進んだ奥へ隠れていった。新たなルートを告げてくれた影の不気味さよりも、発見した喜びが勝っている様子だった。夜道を歩きだしてから初めてアイフォ

ンをポケットに押し込んだ。物体の影が知らせてくれた方向へと直進した。そこには、急勾配で下る石段が隠れてあった。金属の欄干が月によって青く浮かびあがっていた。

劇的な画の変化を期待したが、先ほどまでと寸分違わぬ石畳を敷いた道が続いていた。それはひとつの巨大な城下町のようであった。同じ失態を警戒し、周囲へと目を配り、曲がり角のたびに直進可能なルートが隠れていないか、身を乗り出し覗き込んでいた。時折、月や星の位置を把握するため、上空を見上げていた。夜のざわめきの生み出す突起を、用途の違うやすりを使い、滑らかに仕立てたような静けさで、耳がおかしくなりそうだった。足音だけでも響かせたいという狙いから、タップダンスの要領で、つま先や踵を石畳に打ち付けていたが、カンペールの生ゴムのソールが吸収し、静寂に打ち消された。深度の測れない退屈で不気味な道は、終わりやはじまりをわからなくさせていた。そんな危うさがあった。それでもひたすら、水の枯れた水路のような道を、進ん

でいた。

またアイフォンのマップを開いた。電波の届かない、ネットワークから外れた地点だった。続いてコンパス機能を開いていたが、これだけたくさんの角を曲がれば、方角がわかったところで何の役にも立ちそうになかった。それでも右手にコンパスを握り進んでいた。そのまま十分ほど行ったところで、人工的な建築物が現れた。足を打ち付けるのを忘れ、急いで迫った。そこにはカフェとバーがあった。空洞なカフェとバーが。四度目の来店だった。時間をかけ遠回りをして、また振り出しに戻っていた。歩みを店の前で急加速した。アイフォンをポケットへ乱暴に直し、前傾姿勢で石畳を一気に駆けた。腕を大きく振るダッシュだ。髪が風になびき揺れていた。エレベータで入念に手入れしていた分け目も台無しだった。耳からどんどん紅潮していくのがわかった。スピードを落とすことなく、石段をハードルのように飛び越え、充分すぎる速度を保ち、小動物が知らせてくれた場所で飛んだ。

月をめがけた大ジャンプ。右の拳を夜空へ伸ばした。ブイーン、と音を鳴らし放物線を描いた。

高い視点の先に、未踏の石畳の続きが映った。勢いをつけ跳躍したため、着地の際に膝への衝撃が強く、二秒間うずくまっていた。それからすぐに涼しく歩きだした。太ももの上で指を動かし、リズムをとって口笛を吹いた。短いフレーズをリピートさせていた。音程が定まり曲として固まった頃に、闇夜に溶けていた音符が、跳ね返ってくる地点を発見した。暗すぎるあまり隠れていた、細い石橋だった。口笛を吹き、往来を重ねた。星ひとつない空で月だけを頼りに、陰る位置から高さや幅を測っていた。ソロパートが佳境を迎えた激しさで、口笛は鳴らされた。狙いを定め後ずさりし、点との距離を整えた。そしてフレーズの切れ目の音を飲み込み、息を吐きだし助走をつけ飛んだ。予想を超えたジャンプだったのか、横幅の目算を誤ったのか、着地した石橋から勢い余って落下しそうになるのを、左を向くことで踏み留まった。右を向き歩きだすと、

電話をかけた。

「もしもし……」と言ってすぐに、敵と激突したかのような反射的な歩みの止め方をした。「……おや、君にかけたつもりはないんだけれどな。番号だって知らないし、かけようがないよね。まあ、問題はそこじゃない。どういった事情なのかな。いかなる理由であったとしても、歓迎はできそうにないことは断言できるよ」

返事をするのがやっとの様子だった。相手が答えるのに注意深く耳を傾けると、なぞりながら返した。

「なるほど。それで勝手に電話にでたというわけだね。親切とか迷惑、がっかりやモラルをまとめてぶつけられたみたいだよ。君にもわかりやすく説明するならば、マヨネーズにケチャップ、ウスターソース、タバスコなんかの冷蔵庫に眠っている調味料をココットにぶちまけ、スプーンで混ぜこぜにしてだね、

目玉焼きに塗りたくり、いっぺんに口へと放り込まれた感じだよ。わかるだろ」

語気が強まっていた。歯痒さを押し殺し、静かな夜に向かって無音の舌打ちを吐いた。会話が相手のターンに移るたび、天を仰いでいた。ボタンが掛け違えられたままの押し問答は終わらない。

「君が偶然だなんて言えば、仕掛けられた罠に誘い込まれたのだと、強烈に確信してしまうんだ。申し訳ないことだけれどもね。信用していないとかの問題ではないんだ。うん。お願いだから黙って聞いてくれ。いいかい、どうか、そんなに、居心地が悪いと感じる所で、無理に居座らないでくれ。知っているとは思うけれど、ボクはそこへ向かっているんだ。できるならトイレでこもりっぱなしの君に会いたくはない。左顎だったかな、うん、うん。どっちだってかまわない。とにかく、それほど鏡に映る髭が悩ましいのならば、すぐに家へ帰りシェーバを手にするべきだよ。歯にポップコーンの硬い粒がはさまったのな

ら歯ブラシを、汗だらけで臭いが気になるのならシャワーを、冷えた体に温かいスープを、そして子供たちに優しさを。ちっとも伝わらないだろうけれど、精いっぱいの冗談を言ってみたんだ。散々たる出来栄えだよ。けれど間違ったことは言ってはいないはずなんだ」

懇願に近い説得をしていた。それでも望む方位へ会話は進まない。

「誘いに乗れなくて悪いんだが先客がいるんだ。彼と黒いビールを飲まなくちゃならない。君の拾った、その電話の持ち主とね。ピザを食べることになっているんだ。君だって知っているだろう、ピザは八等分にカットするんだ。三人で食べるのに、適さない食べ物なんだよ。わかるかな。心配は無用だよ。こちらはいたって順調だからね。ベストを尽くしていると言っていい。ハンマーのように音が投げられているのだから、実に近くにいるはずさ。だから、だからこそ君は家に帰り、髭を剃って欲しいんだ。大切なことだから何度も言っているんだよ。わかるだろ」

アイフォンの充電が切れ、小さく震え電源が落ちた。わざとらしく肩をすくめ、石畳の溜に座った。ぼんやりと首を上げ、雲の笠をかぶった青い月を見上げようとした、その動作の過程で、静止した。投げられていた音は記号として固まった。夜も沈黙も、視界の限りが止まった。長くも短くもない小休止だった。止まっていた世界は、到来と平等に突如として静寂を破り、開放を迎え、一斉に動き出した。あらかじめ入力されていたほどに、素早い挙動で石段を下った。欄干を掴み沈んでいった先は、ナイトクラブの入口につながっていた。歩を緩め、パーカのフードを整えてから、前髪の三分の一を左耳にかけた。

正面のエントランスには背の高い黒のテーブルがあり、坊主頭の黒服がインカムをつけ立っていた。その背後でピンクのワンピースを着た彼女が、壁にもたれていた。前髪を編み込み、まとめていた。それに気が付かない素振りで視線を逸らすと、コムデギャルソンの革財布から、入場に必要な身分証と紙幣をさぐっていた。しかし四つ折りの財布のジッパーを開けると、運転免許所や保険

証どころか、クレジットカードや、レンタルビデオ屋の会員カードがなくなり、札入れも空っぽで、わずかばかりのコインだけがあった。それでも途方に暮れるではなく、暇を持て余したかのように、入口に二台並んだ自動販売機でジュースを選んでいた。目を細めコインを投入していると、声がかけられた。

「こんばんは。ずっと待っていました。ゆっくりお話したいんですけれど時間がありません。急いで欲しいです。できればジュースもあきらめてもらえると助かります」

息を切らせ早口で言った。それに対しぼんやりとした表情で呑気に返答した。

「やあ、久しぶりだね。どれくらいだろうか。とにかく、ボクは君と会話をできるのが、ものすごく嬉しいんだ。一人旅でナイロビの街を散策中に迷子になって、やっとのことで宿泊先のホテルへ辿り着いたことに、例えたっていいくらいだよ。ナイロビがどんなところなのか、ノートに箇条書きしたって五行も

埋まらないだろうけれどさ。そんな感じだよ。エクアドルだっていいんだ。実に、でたらめなことばかりを言って申しわけないが、これでもボクは興奮しているんだ。このままピザでも食べられたならば、とても喜ばしいだろうね。こちらとしても、急ぐのには大賛成だよ。だけど、どこを探してもＩＤと現金がないんだ。すごく残念なことにね。だからボクはジュースを飲んで、少しここで休んでから帰らせてもらうよ。君はすぐに戻るといい。もしも外の風に当たりたいのなら、ジュースくらいはごちそうさせてもらうよ」と言い終えると、自動販売機へ手を広げてみせた。すると彼女は速やかに返却レバーを回した。コインが落ち重なり、ちゃりんちゃりんと鳴った。

「今夜はスタッフ扱いなので、ＩＤも入場料も必要ありません。これを首から提げてください。そして中へ入ったら、ジュースの代わりにお酒でもごちそうしてください。たっぷり待たせた分です。さあ、行きましょう」

彼女はしっかりとした口調でスタッフパスを渡すと、手をつかみエントランス

へと引っ張っていった。

「なんだか君には、温度があるね。すっかりと良くなったよ。砂漠でだって君がいればやっていけそうだな。軽薄な意味ではなくってね。心からだよ」

自動販売機の返却口にコインを残したまま入り口へ向かった。

「それじゃなんだか私がラクダみたいな扱いじゃないですか。こぶなんて背負ってませんよ」

二人は種類の違う微笑を浮かべた。

「ひょっとしたら、来てもらえないんじゃないかって心配していたんです。もうパーティどころじゃなかったですよ。待ち人の来ない哀れな女の子だって、ばれてました。すっごく健気だったはずですよ。ナンパじゃなくって、心配されて声をかけられましたからね。ありがちだから言うのも嫌ですけど、手も冷

え切ってます。もし針に糸を通すような、繊細な作業を要求されたら、代わりにお願いします。とかとか、いっぱい話したいんですけど、とにかく時間がないんです。ＤＪには予定よりもずいぶん長く引っ張ってもらっています。急いでください」

彼女は話しながら、何度もくすくすと笑っていた。無表情な黒服に、胸元のパスを掲げ提示した。視線を動かさずに、インカムの挿さった耳を軽く押さえ、目だけでうなずくと、ゲストリストに印を入れ城内へ導いた。

８－４

エントランスをくぐると、背の低いドーム状の壁に、砕かれた鏡が一面に張り付けられてあった。床には灰色の細かいタイルが敷き詰められていた。ダウンライトの反射が強く、彼女の先導に従い、うつむき歩いていった。彼女は後ろを振り返り話しかけていたが、足元から登る爆音に消され、会話にはなってい

なかった。メインフロアへつながる順路を外れ、クロークの突き当りに垂らされた、黒く重いカーテンのなかに入った。細い廊下を直進すると、「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた鉄の扉に行き当たった。彼女は迷いなく、その扉を開いた。すると遠ざかっていた音が、堰を切って跳ね上がってきた。さらに奥へ進入すると、埃っぽく陽のあたらない、物置用のスペースがあった。屋根裏部屋のような天井の低さで、腰をかがめなければ動けなかった。木の床は真下から突き上げるバスドラムと共鳴し、ぎしぎしとひずみ、積まれた段ボールが揺れていた。背後で扉が閉じられると、辺りを照らすものは、数メートル先の垂直に昇る妖しい湯気だけだった。彼女はそこをめがけ進んでいた。円形に切り取られた穴には梯子が掛けてあり、彼女は赤いヒールで器用に降りていった。降り立った足元には、ケーブルが無数に這っていた。そこはＤＪブースのバックステージだった。アーティストが開演後に出入りするルートを、辿ってきたのだ。彼女が顔を寄せた。

「フロアで待ってますね。終わったら朝ご飯を一緒に食べてください。そして、たくさんお話をしましょう」

消えていく彼女を、呆然と見送っていた。彼女に代わってステージ袖に現れた、サイドを深く剃ったツイストパーマのスタッフに促され、ペンライトで照らしながら、ステージへ誘導された。送り届ける役目を終えると、ホテルマンのように仰々しく礼をし、持ち場へと帰っていった。放り出されたステージの脇で好奇の目を隔てるため、パーカのフードをかぶり、観客へ背を向け、レコードの入ったバッグを漁っていた。ヘッドフォンを肩ではさんだＤＪが、汗を拭いながら振り返った。

「おはよう。ここで終わるから。準備を頼むよ」

声だけで聞き取れないことを考慮し、口の動きからも読み取れるように、しっかりと発音していた。返事をせず、リズムをとっているのか、うなずいている

のか曖昧に首を縦に動かした。そしてレコードケースに向き直り、左右の手で交互にレコードを引き出していった。それから、重大な忘れ物をしてしまったと、体を使って大げさに表現した。暗闇でも伝わるように、顔を極端にゆがめ左目をつむる、でたらめな演技でステージを捌けていった。握ったこぶしを額へ押しあて、やましさを詰めたリュックを背負い、降りてきたばかりの梯子に足をかけた。

「ねえ、次は君の順番じゃないのかい」

古典的に体をのけ反らせて驚いた。そして声の主を見た。

「やあ、やあ。ずいぶんと印象が変わったね。ずいぶんだよ。声以外は別人みたいだ。実に懐かしいよ」

うろたえ揚々と呼びかけた。そこへ、温度差のある冷静な声が返ってきた。

「君は、梯子に登ってどこへいくつもりなんだい。アクションゲームの基本として、一度降りてしまった梯子はもう使えないはずだよ。どれだけハードが進化しようとね」
善意で苦言を呈する余裕で言っていた。

「とっても大事な忘れ物をしてしまったんだ。だから取りに戻らなければならない。鍵が入った宝箱を開け損ねてしまったんだ。ひとつ前のダンジョンまで帰らなきゃならない。人生はアクションゲームよりＲＰＧに近いんだ。知らなかっただろ。ボクもついさっき覚えたばかりだよ」
手さぐりの返答は饒舌だった。静かに聞いていた彼は、くちゃくちゃと嘘を吟味するようにガムを噛み、味がなくなると言葉を吐きだした。

「僕は臀部に、つまりはサルのおっぽの名残りのあたりに、根を張っていたんだ。ズボンを貫いて、あの店の椅子とつながっていたんだよ。気がつけばずい

ぶんと太く深く育っていた。言い逃れができないほど、はっきりと一体化してしまっていたんだ。椅子もテーブルも埋め込み式で設計されてあるから、店の一部になっていたと言った方が正しいだろうね。君の後ろ髪を引くための、たちの悪い冗談とかではなくてね。ひょっとしたら気が付いていたかもしれないね。いつ君が来たって、僕はずっとあの席にいただろ。それは動けなかったからなんだ。少し長くなるけれど、降りてこなくてかまわないのかい」

梯子の三段目にぶら下がったままで首を横に振り、顎で先を促した。

「新しいゲームソフトを発売日に、開店前から並んで購入したんだ。心待ちにしていたとかではなくてね。予定のない朝に発売を知り、なんとなく買いに出ただけなんだ。とてもお手軽にね。そんな感じでソフトを手に入れて、家へ帰ろうとしたんだけれど、なんてことのない平凡な交差点で、ワッフルの匂いを嗅いだらね、どういうわけだかすぐにゲームをプレイしたくなったんだ。ベルギーのあのワッフルだよ。別に部屋へ戻ったところで、待ってる人なんていな

いし、すごく気持ちのいい天気だった。ハードだって持って出かけていたからね。むしろ、帰る理由が見つからないって思ったんだ。それがワッフルと、どんな結びつきがあるのかは、僕にだってわからないよ。特別な思い入れや、トラウマなんてないからね。生涯で七個くらいしか食べたことのない、比較的ドライな付き合い方をしてきていたよ。それなのに喚起されてしまったんだ。はっきりと覚えている。それで立ち寄ったのがあの店の、あの席なんだ。いろんな偶然が連鎖したのか、一貫性や整合性があるのかは、未だに謎だよ。風が吹いたら桶屋が儲かったり、蝶の羽で天候を左右する類のやつだったのかもしれない。いや、ちょっと違うな。最後のは、いったん忘れてくれてかまわない。悪いが、なかったことにしたいんだ。デリートしてくれ。うん、いいかな」

面倒さを隠さずに再び顎で促し、梯子をつかんでいた手を持ち替えた。

「とにかくあの店で、買ったばかりのゲームをプレイしたんだ。するとどういうわけだか、もの凄く腹が減って、どれだけ食べても満たされなくなってしま

ったんだ。体に吸収されたり、溜まったりせず、さらさらと分解されるみたいにね。オーダー票が余白なく、三枚は埋まるほどまで追加注文したよ。ただ記憶にあるのはそれくらいで、どんな風に過ごしていたのか、はっきりとしないんだ。ゲームの内容や、何を食べたのか、どんな音楽を聴いて、どんな会話をしたのか。さっぱりと思い出せないんだ。あらゆる感覚が昏睡してしまったようにね。ふと意識が回復した時には、つながっていて、身動きが取れなくなっていたんだ。それなのにだよ、多くの人たちは、僕に起きている事態へ、無関心だった。スタッフやお客やなんかがね。何も言わないんだ。ラストオーダーを取り終え、最後の客を見送り、裏口から水の入ったバケツとモップを担いでくると、店内のゴシップで盛り上がりながら片付けを済ませ、消灯し帰っていくんだ。まるで僕が、どこにも存在していないみたいでさ。怖くなるんだ。わかるかな」

「大丈夫だよ。ボクにはちゃんと、君が見えている。悲劇の妖精を気取るなん

て、ずいぶん君らしくないじゃないか。ゲームのやり過ぎで、いささか疲れてしまっているんだよ」

早急に彼が語るのを切り上げたいとわかる、虚ろな同情を送った。

彼は敵意を含んだ表情を隠し、語気を強め言った。

「僕はここに来るために、太く育った根を切ってきたんだ。激痛の伴う命がけの戦いだった。わかるかな。体の一部を麻酔もせずに、のこぎりで切断したんだ。いつか一緒にプールや銭湯にでも行ったならば、確認してもらってかまわない。その痕は残り続けるだろうからね。ああ、そういうことか。丸ごとわかったよ。君がここにいるから、僕が来なくてはならなかったんだ」

梯子に好戦的なため息を吐くと、まくし立てるように言った。

「ボクは君のお尻にはちっとも興味がない。嗜好にコペルニクス的な変化があったとしてもね。さらに注射針を刺されるシーンすら目を背けるくらいに、ス

ブラッターものは苦手なんだ。うんざりさ。君の苦労話に対してのボクの感想は、特にない。社交辞令の返答は向かなそうだし、ボクの手はじんじんと痺れていて、大事な荷物を取りに戻る必要に迫られている。いわば取り込み中なんだ。そればっかりが気がかりで、半分だってまともに聞いていないよ。急激な腹痛でトイレに駆け込みたいのに、商談を持ちかけられているみたいにだね。どうかシチュエーションを憎んでくれ」

「いいんだ。僕は君を責めたいなんてちっとも思っていないよ。誰にだって事情はある。君の指摘どおり、僕は僕の事情で一方的に話し過ぎた。その件に関しては、反省しているよ。ただ最後に、もうひとつだけ、どうしても聞いて欲しいことがあるんだ。すぐに終わるから我慢してくれ。いいかい、君の、掴まっている、梯子の上にある穴は、完全に、塞がっているよ、ということなんだ。数分前に、しっかり蓋をしたんだ。僕が箱買いしたハイチュウを敷き詰めてから閉じたよ。入れ歯をはめる原理だね。腰がどうかなりそうなほど重かったよ。

だから登ったってどうにもならない。信じられないのならやってみればいい。惨めに下降してくるまで僕がここで待っていてあげるから。寂しくならなくてすむだろ。それともじっと梯子に掴まり、背中が開いて羽化するまで待ってみるかい」

彼は淀みなく、丁寧に言った。

「なるほど。いいだろう。本心を包み隠さずにぶつけるから聞いて欲しい。君は死ぬまで、あの店の椅子に張り付いていればよかったね、だ。届いたかな」

顔の筋肉を隆起させ、唾を吐くように言葉にした。

「ありがとう。僕がここに呼ばれた目的は、蓋を閉じるためだって、はっきりと確信できたよ。そのためにここへ来たんだ。わかってくれよ。君だけのために融通するほど、ルールってものは軟弱にできていないんだ。それにしても素晴らしいね。どうやら人間というのは自らの行動の総体らしいんだ。とっても

君らしいじゃないか」

彼は携帯用ゲーム機を操る形を指で作り、梯子に向けて手をかざした。

「ねえ、君が直接的にして間接的に伝えようとしている芯の部分が、ちっともわからないんだ。寓話みたいなそれの示す部分がさ。ボクの頭が悪すぎるせいかもしれない。ただ、これでもボクは自分なりに精いっぱいやってきたんだ。ずいぶんな目にもあったよ。恵まれてなんていない。それなのにまだ、こんなクソみたいな押し問答が続くのか。あまりに理不尽で、不条理が過ぎるよ。誰とも、どこにも関わりたくないと望んでいたけれど、そんなに酷いことはしていないはずさ。できないことを、できないって言うくらいは許されてもいいだろ」

「いったい、どうしたんだい。駄々をこねて汗だらけの僕の胸に顔をうずめて泣き出しそうじゃないか。それにだよ。君は本当に、できないって一度でも声

にだして言ったのかな。無口を装い、ふらふら姿をくらまそうとしているだけじゃないのかい。そんなことしたって、自体はわずかばかり留保するだけだって知っているだろ。台所にある腐敗した卵の匂いを嗅ぎたくないからって、別の部屋を渡り歩いているのと同じだよ。捨てるまでなくならないんだ」そう言い終えると、ティシャツを摘んではたき胸元に空気を入れた。プリントされたサイケデリックなフグが、ヒレを動かしたみたいだった。彼はさらに言った。

「僕はかまわないんだ。僕が君へ果たすべき役割は終えたからね。その結果で君がどんな選択をするのか興味がない、というよりも知る由がないんだ。根を断ち切った僕がこれからどうなるのかを、君が知らないのと同様にね。すでに僕に対しての役割は果たしてくれたよ。君が素直にＤＪブースに立って、レコードを回すような人間であれば、僕がここへ来る必要はなかったのだから。感謝しているよ。どうかな。慰めになればと補足してみたんだけれど。まあ、難しいだろうね。じゃあ、お先に失礼させてもらうよ。どこへ行っても音は止ま

らず流れるのだから、僕たちは踊り続けるしかないんだ。たぶん、だけれど」
彼は言い終わると背を向け、小さく手を上げフロアへ出ていった。それを無視して、重要なひび割れや欠陥を精査するように、鉄格子を睨んでいた。しばらくその姿勢を崩さなかった。息継ぎの間隔で首だけを上下させ、梯子の先へと目をやっていた。そこには闇があるだけだった。

フロアではスネアドラムの長いロールによって、今夜の盛りの嬌声が生まれていた。ほどなくして熱狂の波が静まるのに合わせ、筋肉を弛緩させると床へ滑り降り、苦い顔を作った。長くぶら下がっていたせいなのか、バランスを失っていた。怯えに苛立ち、汗をかいていた。ＤＪがブースを離れ、梯子まで歩み寄ってきた。そして興奮した音量で問いかけた。
「もういけるかな。持ってきた音源を使い切りそうなんだ」

親しげに、ＤＪの右肩へ手をまわして言った。

「やあ、悪いね。まったくもって体調が優れないんだ。トイレに行かせてもらいたい。おそらく昨夜の生牡蠣が原因かもしれないよ。屈強な殻に守られた艶めかしいぷっくりとした身に、柑橘の酸を絞りかけ、薄皮を割くように歯を入れると、自然の恩恵が官能的に弾け溢れるんだ。卵型のアイスクリームくらいの幸せがだよ。そこにシャブリを合わせてごらん。擦り切れるまで世界中で流されるレコードには、やっぱり針を落とさせるだけの、有無を言わせぬ価値が備わっているんだ。そう、ゆで卵にはマヨネーズだし、寿司にはコーラなんだ」

詰め寄る格好だったＤＪは、困惑し体重を後ろに預けた。

「なんだか、よくわからないよ。おかしな奴だな。とにかく急いでくれ」

「ありがとう。君とは友達になれそうだね。ではトイレに行かせてもらうよ。ジャスティスの『Waters of Nazareth』をループさせておいてもらえないかな。君のレコードケースに入っているのは知っているんだ。頼んだよ」そう言い終

えるとブースへ戻るよう手で示した。ＤＪが渋々とバックステージを後にするのを待ってから、パーカのフードを可能な限り目深に被り、顔の前で手を合わせフロアを出た。

誰にも触れられず、闇にまみれ、ムービングライトと人の渦をすり抜けていった。心頭や狂喜、解放などの蠢きを希求し宿す群れを、しなやかにかわし横を過ぎた。肉体は反射に頼り、夜目をはたらかせていた。あらかじめ決められたルートをとっているように、迷いがなかった。それは特定の彼や彼女たちと遭遇しないために選択された、影に埋もれた道筋だった。

トイレへと着いた。もしくは着かされていた。壁面はすべて鏡で囲まれてあり、高い天井から、ダウンライトがむきだしで垂れていた。男女を区別する「髭」と「ヒール」をかたどった、金製のロゴ以外に装飾はなく、イベント用のポスタが貼られた形跡などはなかった。パーカのフードを外すと、向かって右の「髭」

に入っていった。なだらかな湾曲をした鏡面のスラロームで、長くなったり膨らんだりした姿を写し、奥へと進んだ。その途中、フードを被ったことで崩れた髪型を直すため鏡を覗くと、無限に増殖した合わせ鏡の像が写され、実態がわからなくなっていた。それほどまでに汚れや指紋のない、完璧な鏡だった。諦めた様子で髪をくしゃくしゃと手で掻き、反射にとらわれないため、通路の中央を行った。入口からずいぶん歩いていたが、まだトイレらしさは表れてこなかった。手洗い場や水の音、人の気配がなかった。ただ延々、右へ右へと、エスカルゴ状に巻かれた渦が続いていた。色を失った鏡の道は、ずっと沈黙を守っていた。ホールから漏れる音が途切れると、トイレにはスピーカも設置されていないため、足音だけが奇妙にこだました。

乱反射を乱反射させた底なしの世界が、際限なく続いた。それは単調ではなく、複雑な絡まり方のせいか、扇情的でさえあった。歩いていると錯覚させる虚構ではないかと疑うほど、どれだけ進めども景色は変わらなかった。それでも、

足を前に出す他なかった。床面に靴跡は残っていなかった。そのため、どちらにトイレがあり、どちらが入口なのか、判別が困難なほど類似していた。靴のソールを床に擦り付けていたが、曇りのない鏡面に、蹴りあげた太腿と臀部が写るだけだった。

次第に螺旋の円周が短くなり、通路の幅も狭くなったかに感じられた。時間軸すら歪んだ空間に幽閉されていたため、もはや歩いているのが誰、で反射している彼、とその影、の所有者やはて、といった具合にあらゆる境界線が、あやふやになっていた。それは、混沌とした自身の内面に飲み込まれた姿のようであり、肥大する自身の膨張を制御できない姿のようであった。

脈略なくダッシュをした。残像を振り切らんとする様子であったが、ぴたりと重なり、影の粘性の強靭さを浮き彫りにした。唐突に膝を曲げ、体を落とした。そして両手を頭の上に添え、しゃがんだまま横滑りをした。二分の一の体積と

なったことで、鏡の賑わいを視覚的に半減させた。摩擦力により止められた地点の正面に、黒い跡が付着していた。ゲシュタルトが崩壊しているためか、判別に手間取り、目をしばたかせ、前後運動によってマニュアルで焦点を合わせていた。それはどうやら、反転し書かれた文字だった。誰が書いたとも知れぬ、長くも短くもない言葉が、鏡文字で記されていた。ここに踏み込んだ人間が存在するという証拠であり、鏡に寄与された唯一のひずみであり、恒久的な空間が断裂された疵だった。はやる気持ちに従順に、背面へとせわしく首を振り、一文字ずつ読み解いていった。

卵は必ず割れるんだ
割れない卵はないんだよ
腐る前に割らねばならない
例え話でないんだよ
単なる卵の説明さ

わかるだろ？

それはトイレの落書きらしく、悪趣味だった。文字に声色と表情を付加させる、雄弁な書体だった。解読したことによる敗北感の落としどころを探すように、メッセージの書き主がこの場所でしていたのであろう仕草で、髭の剃り残しをチェックしていた。毛穴のない、プラスチックに似た質感の肌だった。塗り替えたならば、何者にでもなれそうだった。それでも上顎まで入念に確かめていた。肌の表皮を引っ張り、上下左右に首の角度を変えていた。右の顎関節を鏡に映すため左下に顔を向けると、メッセージの末尾に添えられてあるシルバーの突起物に気がついた。それはハンドルレバのようであった。伝言の一部なのか、次なる局面へとつなぐ扉の入り口を開くノブなのか、斬新な絵文字なのか、現状ではないどこかへ貪欲に、躊躇なく回した。右へ左へと幾度も動かしていた。一度目にのみ、機能を連動させる負荷があった。ハンドルレバから離れ、訪れる変化を期待し四方を窺っていた。耳を床に近付けては遠くから轟音を伴

い迫るものや、天井を見上げては管を破裂させ降ってくるものなどを、忙しく待っていた。それでも予兆すらなく、不変のままであった。沈黙に耐えかねる様子で、唯一の手がかりであるハンドルレバが付いた鏡面に目を戻した。すると、人工的に着色された、濃淡のない、画一的でのっぺりとした水の色が、膝の下までを覆っていた。それは鏡像にだけ映る虚像なのか、衣服や肉体を濡らすことはなく、液体でもなかった。それは冬の日の夕暮れが夜に融けるように、素早く静かに包んでいった。

波の立たない切り取られた水平線が、寸分の誤差もなく平行に広がっていた。手で触れようと身をかがめ掬うも、気体を拾うばかりで重量は得られていなかった。幾度目かの挙動の刹那に、水の色はすっぽりと身長を追い越した。酸素が着色されただけのようであったが、呼吸のたびに、虚空へぷくぷくと気泡は昇っていた。どれだけの範囲が覆われているのか、把握することは不可能だった。視界の限りどこまでものっぺりと、どこまでも同じ色だった。訪れた環境

を迎合すべきか、拒絶すべきかを決めることができず、体を固まらせていた。それでも変化の上乗せは起こらなかった。いらいらと納得したように再び足を動かすと、水圧の抵抗により、半分以下のスピードでしか歩けなかった。泳ぎの要領で、空気をかきながら足をばたつかせると、浮力に押し上げられ宙へ出た。パーカやカンペールの赤い革靴は、少しも濡れてはいなかった。

鏡と実像との境目は、水の色によって消されていた。それでも、進んでいる方向に間違いはない。いつだって、一方向にスクロールすることしかできないのだ。ただ縺れ、漂い、泳いでいた。

そしてワルツが流れた。ブレイクダウン。

穏やかな旋律が淡々と、水のようなものを伝い響いてきた。音色は無条件で細胞を緩和させ、暴力的なまでの魔法にかけられた表情となった。

「さよならを告げずに去っていった拒食症と虚言癖を患うピアニストにして七番目の恋人や、ベネフィットとキャッシュフローの世界でローンを抱え神経をすり減らしていた近況を知らない友人や、決断を悔いて耳を塞ぐことで声を失くしたバイト先の常連や、煮物の匂いのする小さな街の公園から覗く網戸越しの机で鯵の開きを食べていた老婆や、サーティーワンアイスクリームとケンタッキーフライドチキンが向かい合わせに並ぶ郊外の外れで椅子から垂直に倒れるまでビールを飲み明かし他者の否定しかしなかった相棒や、香港の空港でトランジットする待ち時間に訛りの強い英語で話し別れ際にイーストパックのリュックからキットカットを渡してくれた腰に乙女座のタトゥを入れた少女や、芸術と日常性について机上で熱弁をふるい奇抜な服と髪型を声のトーンとともに落としていった建築家志望の後輩などを含む、狡猾な言葉で背を丸めたり、褒め言葉で傷つけられ背を尖らせたり、自身の空虚に向け棘を投げ背を伸ばす無数の灰色の人々と、すれ違い、くぐり抜け、死した過去に埋没してもなお、ささくれのような襞を残す容姿も変わり果てたのであろう彼や彼女たちと再会

したならば、にっこりと迎え入れ、夕映えの縁で紅い風にあたり、ワルツに打たれ、染まった旋律と、喜びとを分かち合うのだ。ボクは、胸をすっと熱くするだろう。時はずっと続くのだろうと」

フラッシュバックの渦にのまれ、穏やかな表情で、息苦しそうに回転していた。足をばたつかせることや、手をかくことをやめ、諦観を湛え、スローモーションで海底へ降りた。一点に目を据え、理想に耽っているようであった。それを遠くのビニール袋に似た物体が嗅ぎつけ、上下運動を活発にした。攻撃性を隠し、素知らぬ顔で近づいていった。白い物体は格好の餌食に慌てることなく、悠然と距離を詰めた。三々五々に散在していた仲間たちも群れをなし、数を増やし集ってきた。先陣を切っていた白い物体が、標的へと接近し、激突する間合いに入った。寸分の猶予もなく、追いつめられていた。

すると歯を噛みしめ、喉をかきむしった。苦さと倒錯するほどの甘さに、舌を

だしていた。鞭を連打された形相でもがき、液晶画面の右上へと吸い込まれていった。白い物体は追いつくことができず、対象をなくし、散り散りに回遊した。

液晶画面には平面的で一貫した俯瞰が、厳然と継続され、機械的にページを捲り、チャプターを進めていった。そこで、リモコンにより遠隔から、テレビの電源が落とされた。ブラックアウト。暗闇となった部屋で、見えない手によって、ヘッドフォンが外される。そして複数の混声での、斉唱が始まった。

「やあ、どうだい。あの日の君の記録映像だ。余すことなく撮れていただろう。最後のシーンなんて痛快だね。屈折した理想論を、君が苦し紛れで語っていたところだよ。バグったふりでもしたかったのかな。そんなにね、都合よくはいかないよ。ぬるりとした逃避はさ。ここまで敢えて、口にしなかった言葉だよ。君は逃避の含む毒がもたらす甘さ、が好物なんだろ。あの律動がね。だけど気

にすることはない。何度だって逃げればいいんだ。同じ道を、同じ方向に進む、同じ顔が、いくつもあるのだから。望むならば数字で表記できないくらい無限に、増殖することだって可能だ。存分に残機を減らし、逃げればいい。幸か不幸か、環境や世界なんていう、君を取り囲むものは、君のせいでは何ひとつ変わらない。君にとっての世界が、少し違ってしまうだけのことだ。だから好きなように、次の逃避までの暇つぶしに励めばいい。もうひとつ敢えて口にしていない言葉があるから、そいつを拾いに行くのも悪くないよ。とにかく君には、期待しているんだ」

言い終えると、声の主たちは衣擦れをさせ、ぞろぞろと部屋からいなくなった。ここにはもう潜ったり、飛び越えたり、ダッシュしたり、蔓に掴まりよじ登ったりするステージはなかった。ギミックの外側へと、摘まみ出されたのだ。

ぽつんとした暗闇のしじま視点が返却される。ブレイク。

8 - 4

陽の消沈がどちらともとれる、豆電球をかき集めたような橙の部屋で、あまりの渇きに目が覚めたんだ。どれくらいか定かではないけれど、ずいぶんと水分を摂取していなかった。からからと喉が鳴くほどに渇いていたんだ。だからボクは、飲み物を買わなければならないと思った。冷蔵庫にはペットボトルや缶の飲み物はある。塩素の臭いに鼻をつまめば、水道水を飲むことだってできる。ちゃんとしたグラスはないけれど、鍋や小皿で代用したっていい。だけど、おそらく、この部屋にある飲み物はボクの喉を通るに至らないんだ。どういうわけだかプルタグやキャップを開栓したところで、阻害され、達成することができなくなってしまう。だから新たに飲み物を買いに出る必要があった。へばりついた億劫さを振り払ってね。ちっとも気分ではないのに動かねばならないなんて、生きるとは実に強情だな、と尊大に悟った口調でメールでもしようかと思ったけれど、そんな予断を許さないし、そんな相手はいなかった。

ボクはソファに深く腰掛けたままで、くたくたのティシャツとハーフパンツを脱ぎ捨てた。それから渋々と立ち上がり、本棚に片肘をつきクローゼットの扉を引いた。奥歯が疼くくらいに見慣れた光景の登場だよ。壁側の左半分に緑色の七分袖のティシャツがぎっちりとぶらさがり、右半分には青いオーバーオールが七本吊るしてある。どいつもこいつも一緒だった。着古し加減やほつれ具合に相違がないんだ。ワンセットしか服を持っていないのと同義だね。無作為にティシャツとオーバーオールを引っ張り、乱雑にハンガーから外すと床へ投げ、クローゼットを閉じた。そして扉鏡に目の高さを合わせ、左右に伸びた口髭を交互に撫でつけた。それらを理想的な角度へ整えると、本棚に重ねてある緑色のキャスケットを被り、床に寝転がった服を拾って、上から順に身につけていった。渇きを忘れるほどの無味なルーティン。反芻や煩悶はクローゼットの奥で、反復という虫に喰われてしまったんだ。

着替えを済ませると鏡の前に立った。ほとほと退屈するシルエットにあくびが抑えられなかったよ。おかげで眼球に残り僅かな水分が与えられてしまった。涙でぼやけた視界で鏡を見ると、肌の表皮が乾燥していなくもないような感じがした。ジョンソンアンドジョンソンの紫のクリームで、油分を補ってもいいくらいだってね。てらてらと引っかかりのない合成樹脂の肌が照り返していたとしても、必要なのは紫の香りを嗅ぐための口実なんだよ。

しかし「これじゃまるで、死んだ金魚に餌をやるようなもんだ」と声にした。久し振りに聞く自分の声は、頭の中で鳴るより二音ばかり高かった。ただ、その違和感を超えて語感を気に入り、立て続けに言ってみた。抑揚をつけず、平坦な口調でね。すっかり耳心地の良さに乗せられ、リビングからバスルームへ向かう時には、ホワイトストライプスのギターリフまで口ずさもうとしたんだ。それなのに、ちっともフレーズとして成立しなかった。音符の過不足が問題なのか、音程を狂わせてしまっているのか、それさえもわからなかったんだ。喉

を揺らし口からこぼれると、ぐちゃりと潰されてしまった。ボクの意図するリズムやメロディが行方を失っていたよ。音の記憶が残っているのかも、わからない。それもこれも渇きのせいだと断念し、洗面台下の収納スペースを開いた。ジョンソンアンドジョンソンの紫のクリームをはじめとする、日用品の定位置だ。そのはずだった。けれども、そこは、空っぽだった。ギターリフより明け透けにね。残り香や気配みたいなものが、漂白剤に浸け込んだように拭い去られてしまっていたよ。代わりに、わざとらしいグリースがたっぷりと並べてあった。子供が成人するまで髪を油まみれで保てるだけの量がね。買った覚えなんてあるはずがない。

これら数分間に舞い込んだ不条理さを処理する方法がわからないから、便宜的に自分へと罪をなすりつけたんだ。そして部屋の鍵をかけてみようと思った。ずいぶんとぶりにね。「死んだ金魚は土のお墓へ還してあげよう」と言いながらリビングへ鍵を取りに行った。しかし爽快さはなかったよ。仕方がないから

「堕落は楽だが体に毒だ」と即興で作った早口言葉を舌が疲れるほど連呼し、鍵のしまってあるテレビ台の引き出しを開けた。もちろん空っぽさ。どうやらボクが能動的に放棄したつもりでいたものは、最初からありもしないものだったようだ。備わっていないものを、さも手放したように勘違いしていたんだ。嘲笑だね。他に探すあてなんてどこにもない。ボクは「空疎」を「クソ」の発音で吐き捨てた。何も考えていないけれど、何も考えたくなくなった。どこに向かって日常はスクロールされていくのだろう、なんて湧いた疑問も強烈な渇きで蒸発させてやったよ。情けのない垂れ下がった眉をしていることだろうね。感情の捌け口を手に集約させ、オーバーオールのポケットで弄び、玄関で靴棚に羅列してある、先の丸い茶色の革靴を履き部屋を出た。

地上八階のスクリーンでは赤い太陽が冷然と威張っていた。終末観を飽和させた円環が、淡海の空をくり抜き、家屋とビルと路地の成すジオラマへ降り注いでいた。雨上がりのように塵や埃は洗い流され大気は澄みきっていた。そこに

１０００の土管が生えていた。緑色の柱が不規則に突き刺さりデジタルに立っていた。非合法な薬を盛られた幻覚か、莫大な資金を投資したホログラムか、人知を超越した能力が開花してしまったのか。この際、そのどれかであって欲しかった。高鳴りと震えが轟いていたからね。

どこに入ればどこから出るんだろうか。塞がってしまい入ることのできない土管だって、きっとあるだろう。すでに１００１本目のなかに入っているのかもしれない。土管は遠近法も及ばない無機質さで圧倒し、美しい煩わしさを差し出していた。目をつむることさえ許さないくらいのね。すると、むくむくと煙が立ち上るように、頑丈に蓋をしていた感情がこみあげてきたんだ。それにより、ボクが拒絶したせいで、ボクの周りは何もないのだと知らされたよ。消失や喪失ではなくってね。磁石の同じ極が反発するみたいにさ。ボクが側にあったものを、遠ざけてしまったのだってね。

どこへ行っても解決や充足なんてしないんだ。過去だろうと現在であろうとね。拒絶し嘆き、脱皮したふりをして蚊帳の外へ逃げることばかりに捕われてきたんだ。含まれる場所以外で存在したいってね。ないものをねだるのではなく、あるものを拒みながら。

そんな風に孤独を避けていたら、ひとりになってしまっていたんだ。わかっていたけれどさ。望んだことでもあるんだ。なのに、辛くならずにいられない。鼻の奥がつんと痛むよ。ボクは寂しいのかもしれないな。みんな元気にしてるかな。なぜだか、胸の内側が収縮しているよ。嗚咽が肩を揺さぶり、足の指を靴の中で動かした。歯を強く噛みコンクリートの壁に背を預け、それらにじっと耐えた。そうするしかできなかったんだ。マンションから飛び降りそうな不安を引っ込めるためにも。するとそこにね、そこにだよ。

存在をハレーションさせる光があった。光がね。

でも耽ったりはしない。それは自動販売機のジュースのサンプルを、ライトアップしているだけなのだから。いわば空っぽな疑似体を照らすチープな明かりだよ。でもね視覚に射したんじゃなく、投射したんだ。わかるかい。わかって欲しいんだよ、すごく。ボクはこの光が投げられた方へと行くのだろうからね。それは逃げるための場所へ逃げていくのかもしれない。それでもいいんだ。とにかく自動販売機まで全速力で走った。亀の王様なんていない橋を超えてね。

ボクはコインを一枚も持たずに出てきていた。あの部屋で探しても、なくなってしまうだけだし、もうコインの在り処はわかっていたからね。釣り銭の返却口へと手を伸ばすと、あの日に取り損ねたコインがそこにあった。やあ。それを右手で拾い投入すると、様々なフォルムの容器に、味覚を連想させない色彩のデザインがされ、英語でもアラビックでもスワヒリでもない文字がポップに描かれたジュースばかりが並んでいた。ボクは後ろへ二歩さがると、それらを

左からひとつずつ吟味していった。新しい朝に出会った人たちと挨拶を交わすようにね。それが誰によってもたらされたものなのかなんてどうでもよかった。私欲であろうと、天使だろうとね。ボクは何だって受け入れるよ。いい子のふりをするんだ。大丈夫。次はうまくやれるよ、きっとね。ばらばらになってしまいそうなものを腕組みし縛りつけ、赤いランプの点いた自動販売機の前で、たっぷりと時間を費やした。そして、ボタンを押す。音が鳴る。

ジュースが吐き出された音なのか、山吹色したカセットが抜かれた音なのか、卵が割れた音なのか。ちっとも興味はない。

がちゃり。